甲戌瑣錄

五

昭和九年七月上浣起筆

特別
イ4
1919
460

176725

四戒談録五

○自分の庭園にも大きい池があつて、多くの風致をそなへてゐる。庭樹などは池を中心として樹樹さんるまでも、池は庭園の眼目ともいふべきものである。庭園は山水のミニアチユアなどとまでいふ。江湖擬らふ池が無ければ山水といふのへ難いのである。平庭は低りあいが、池のある庭は変化に富んでゐる。水の供給がむつかしい場合があるからだ。自分の庭の池でも水を供給する堀ぬき井が備つてゐる。そんは一時盛んに噴出してゐた自然水が池に溜んでゐるのであるが、附近に多くの住宅が出来、井を堀ることが

38- 9246

次第に多くなるつれて、真の井も漸く涸き出さるくるつれ。赤かし面みを受けて池の渇することもこうつれのであるのに、庭園の池の田のごとくなつて苔が繁茂してゐる。一昨年ぐらいあつたが、池が殆ど淺くなつたので、少しく掘りて、周囲のしがうこが腐朽してから、多くの費を改修後一年未満で、昨年の夏以来あの渇して今日まで、何を原因するのであらうか。此の渇を流さず江戸川と昨年から改修工事が始まり、機械力でみを排除する影響であらうとも考へた。或いは、自分の池ばかりでなく、数十箇所の関口町の友人井上辰

橋本製

九郎氏の池も渇して同じ事になる。全体昨年の夏以来、異常に大雨があつたことは、原因の一つ。附近と大きな井戸が建築されたが、果して江戸川改修が原因であるか、或は、龍動のテームス河が庭を露出するほど渇したことの太陽の黒点と因する説もあり、子孝の池も渇した。大きな原因と称する説もあり、子孝三郎氏は、やはり気象の変化、池と水が渇ちたことは、今改修の侯する演味を見るべきものである。

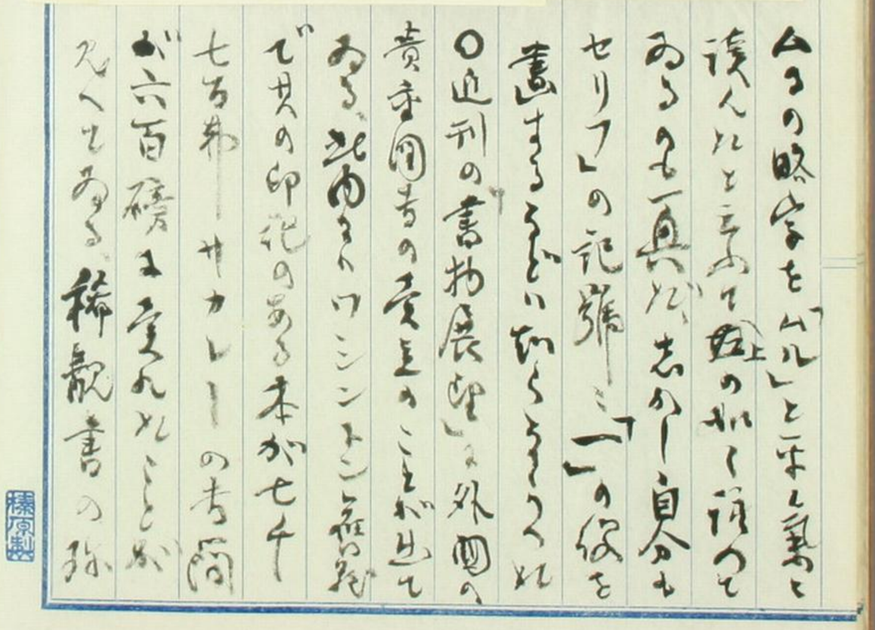
あるとき、池の底の芝生を見ると、病人は起き出て、今
咲いた蓮の花の白が紅白の光を放つ時ひあ
うん、あのときの蓮の花
河骨などが咲く。
仕舞った。今は
能楽を聴くことも出来ない。月の映る白の面
や蔵の影を映すことも出来ない。池と隣人である松
くるった。義兄を支へる松木の醜くい身、心体
をあらはし、庭園の志から気の全部をあらはした
みるのも醜いことの限りである。水を清くしてこそ池も
生きるのだが、水を失つても池の亡き骸と一般である。
毎年夏秋、庭丁を苦しめる松木の手入をすること

とが出来ない。池の手を入れ松木の風致は一面に妻ならず
いが池水の濁りの如きもしかりなり、池を見ず庭園の美観
の相を現はしてもみることも言へず得ることの出来ない
ことだ。自分は多面を好むが、偏へに池の面を待
つことが病ひであるのに、池水の濁りを嘱まれとする
まあそうらいが、松木の部分に入つても餓死の
ろいろ困つたことだ。まず幸にして庭園中の松木を
りを及さることが、池水の濁りが松木と対抗することを
ようにも庭園に全部美麗に帰することを
るのが、池相と対して生来尚つて経験せざる悲哀
を感ずる。

昭和九年七月一〇日記

○井原市公園のぬきし剛毒も初夏時代の先向く

が、丁度團十郎が新富座で「夜討曽我」を演じた頃で、その筋書が連載してあつた。「歌舞伎新報」といふ雜誌のある事も芝居に筋書といふ記錄のある事も、私は初めて知つたのであるが、とにかく面白くて、夢中で讀んだ。今から考へると滑稽なのはセリフのうちの「御座る」といふ語が「ムる」とあるので、馬鹿正直に一々それを「ムル」と讀んで、東京の芝居では可笑しな語をつかふものだと思つて居た。「ム」の字が「ござ」の略字であるといふ事はそれから大分後になつて初めて知つたのである。しかし序にいふが、「ござ」の略字を活版でムの字にするは誤りで、三角形、卽ち△にすべきである。狂言作者が芝居の臺帳や書抜きを筆寫する場合に、手數を省くために最も多くつかふ語を略字にした。卽ち△が「ござ」で「△ル」と書いて「ござる」と讀ましたのであるが、急いで書くから△がムの字に見える。それを活版の方で誤まつて終にムの字をつかつたのが、今日でも一般の例となつてしまつた。なほ同じ種類の略字は、「思入れ」（表情）といふ語が圓形、卽ち○、「ます」といふ語が四角形に對角線、卽ち⧄、これだけは桝の形を取つたのである。それから「セリフ」といふ事を示すのは横線、卽ち「―」の字である。つまり横線と圓と四角と三角とを略字につかつたのである。この事は案外に知らない人があるから、私の幼時の失敗を告白する序に說明して置く。



セント・ルイスのW・K・ビックスビー夫妻の蒐集古書及び他三十點の寄託圖書の賣立が、四月初旬に紐育のアメリカン・アンダースン・ガヤラリースで行はれ、多數の新高値が續出した。ビカ一はジョージ・ワシントンの所藏本で各卷の扉に署名があり、表紙裏に藏書標が貼られて居るウイリアム・ロバートソン著「チャールス五世統治史」（倫敦一七八二年刊、全四卷）であつた。これはワシントンの藏書の最後の部分が費府で競賣された時現れたことがあつて當時卽ち一八七六年十一月廿八日の賣立の際には、現在の寄託者M・P・ケリー夫人の父親が廿七弗で落札した。それが今度は一躍七千七百弗で落された。値段は別として他に時節柄話題となるものではモリスのケルムスコット・チヨウサー（四十八部中の一部、白豚皮裝）が一千五百弗、一八八九年三月十日附で今の大統領ルーズヴェルトが市政の改革に關して當時の大統領ベンジャミン・ハリソンに書き送つた四頁の署名入り書翰が二百二十弗、ラフカヂオ・ヘルンの「神國の主都」の自筆草稿（語數約一萬、一五〇頁）が三百弗等々があつた。

又倫敦のソースビーでド・スザンネ伯蒐集のサツカレー文獻が賣立てられたが、如何に不況とはいへ矢張リユニークな或ひは恒久的價値のある圖書や草稿は相當な値で買手があるといふことを如實に示した。シヤーロツト・ブロンテの「ジエーン・イーリアー」に對する講辭をつられたW・S・ウイリアムス宛のサツカレーの書翰が六百磅で最高値を占めた。この手紙には有名な次の章句が記されて居る。"Who the author can be, I can't guess—if a woman, she knows her language better than most ladies do…give my respects and thanks to the author whose novel is the first English one…that I have been able to read for many a day."ポロック夫人への獻辭のあるサツカレー自身所有の「ヘンリー・エスモンド」が三百磅、同書に就て同夫人へ送つた書翰が百五十磅等々で右の三點と他に三點三百三十磅餘邦價でざつと二十三萬五千圓餘のものは、何れも市俄古の古本商ウオルター・M・ヒルが一人で買込んでさつさとアメリカへ持つて歸つてしまつた。

○内藤虎次郎（湖南）もついに北京籍に入つた。自分は支那人の交りがあつたから、恢諧な性格で、湖南は秋田の生身で、支那人は恐ろしく十和田湖南方を生れたから余計に、支那人であるとの感覚の人であつたが、学殖は身体不似合で、漢学を通じて支那と関係から、屬と支那と混じ、支那通の人であつた。文を能くし又書を善くした、早く奉天の寶庫を訪ひて外交の秘密文書を多く写されて揺り籠らしめられたことも多く、また京都大学と共に有る業績。同志の仮味が有る程度迄は生涯を通つたが、自分の志とは違ふ晩年まで書斎を生涯つたが、自分の志とは違ふ所の考古の研究書物を探つたもの。陶器自分多く新獣書を花とされた。上方の古文献を湖南の是

既に是れ無いとの事。湖南は長く大阪朝日の記者であり、京都帝大の教授であつた。西本願寺の顧問不安の古文書保存を持て来た時、遂早くそれを鎖国したる湖南が、自分も湖南の紹介で素名城城と共に覚えた湖南の原文を拡さんとの事である。自分は京都と海外毎て湖南の南を訪ひ又時々自分の所に生で婚礼被れたる概が湖南と云し、湖南と共に美やまのしに、湖南の云ふのは、私が移居を決めても何の如く新しいやうに云ふと云せるとい、云ふ新術で、もあるが不思議なのは、ものが手に入ると云ふことを生涯人にことが出つたる。退職る人格者で友人の芸能を情

しかが六十九年にして終にかの世人と往復し社書翻かす
[illegible]家と存じもする。今い唯れこれを以て初人を伺ふ
のみなり

○良寛禅師の書体、表面は古所様一流ひ来り自心
の移り行く様ともいふべき身空而已なり。中と影
も表を寡く、良寛の清書を刻して拓本する
ものこの五六代を経ること重後なる。
世俗解良家の原本と称り来るこの地金い家多
の拓かくしれ「大海見物帖」の体
を刻したるものを出し来り、反竹海書しま
す、雪見墨とも拓すんことを請ふ即ち許す
左ら拓もるも岡家と称れる反竹の[illegible]

標原製

[illegible]色彩赤[illegible]羅少し
墨を[illegible]色を薄くせよと注意する不[illegible]

一二
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○夏時家庭に冷蔵庫のあるは誠に法にかなふ
に三伏の日暑熱に苦く倒れと身を冷蔵庫に置く
べきである。昔は暑熱に氷室に入つて凡そ
があるが、今の心地のしるいは地下蔵室を
納涼風呂と宣伝してあるが冷氣を充くるけんぢ
陰氣があるとゝみの氣心しるいはデパートまの冷氣
を冷却する設備があるけれども、人体に自然のもの
で、デパートを出ると忽ち暑熱が高まるので風を
引く原因を為す。まづ人為的の冷却法は人
体を快くするに、仏教家庭も夏時は遠慮
なくして隣戸を閉ち窓鎖庭を
閉ぢる習慣となるが、人の外部の熱氣

やまあげの高か
いかあれば
もいらるる
もりたるもの

ら完

の侵入を防ぐ為めと云ふが、日本人等は極く自然に
ると云ふ。日本の土蔵は入口とヒヤつく程冷氣を感
する。而大きな寺の本堂と坐すると冷氣を覚へる
が西洋家屋の建築もヤヽ似て居るのであるが、
日本の寺は土蔵と異なり夏時暑を防ぐ為めに
や臨を少くすることの一ツ。夏時は殊さら此氣
一と空氣の出入を任すことが習慣で此氣
入るが因にさや風も入つて此氣を冷却するので
そこに自然の妙がある。然るに西洋人は冷風を
防ぐ為ふ風習で、北の冷風を指する感習を信
ずから少知る譚。だが兎角暑熱の強い氣候
に暑地として欠くべからざるの低い不を思ふの

八月十日 氣候のよいうちでもあり。自分は熱がりで汗
かきでもあるが茶寮の高地の好かさい、煽風機のおきな
室で家庭で用いることがない。暑も冷水実に心安い
心静かにすれば暑を忘れる。日本の温泉は格別面白く
きいから、自分の暑中安らぎ面白いことを七月頃家と
静養するを面白の一法としてあるが、浴後の一杯は暑
を祛るの大なる効法であることを主張する。七月二日
記

人々面白き如何獨有禍の不出度可是
浮世無私利但無心静即身涼

○人の罵倒は慣れとなれば死なら即刻したことと

別段に変つた書きぶりをやらうと試みる出来ない
である、然る破格もあつてもよいべきい良寛である、どの格調を
入れるものの相違があるが、従て表しく違つてゐる。或
は良寛のから異つた書きぶりを用ひたのである
ないかと思はれる程である。過の良寛の歌ぶりを御覧
の通りさして偉人及所き良寛の書に富む人ひとり
家と称する所があるから、自分の気がつき、良寛の歌
数が皆異つてゐることいふ言葉通のかう所がある。
二三十字の七集めて字を錯綜し組合せ御覧
の文句をいどうかと考へてやつた
○死い赤ん坊の子の死が又同時に
人の死んだ時から早知死ぬことに拘はつて

しかるに人間は死を懼れる、死の一字を聞くとすぐ
戦慄を思ひ出すものである、自然死の字を避けるこ
が出てくるのも自然の勢である。どうせ人べ死を嫌ふ
やうなるか、こんな一種の修養が大切なことである。
武士が戦場に臨み死を決することも修養から生ず
るのであるが、武士ばかりさうでなく死を嫌ふ修養が必
要である。古の聖人も死を恐れ知らず気構へをしたことは学べ
ばあるいは彼の方法と称するものと死を怖れる習慣を養
へば、事実人の長所の長所故で思ひ切りて死ぬことが出来
る、高の馬の跳ねるのを見るつけ、死の義ることを見るま
けても死を想ふて、そもそも考へ則のやうにいるい
か、死にどこを待伏してゐるかもしらぬ、こちら

ちゃんから待受けようでもいか、今日を最後の日と思あて長
へいの日に備け捨てある。全体死の誠意に自由の誠意で
ある。死を誠ることは、あらゆる束縛拘束から解放さん
ることである。死は怖るべきものでなく歓迎すべきものである。全体医者とか人
死を恐れさせるのは病気とか人は死ぬのだとか
生きてゐるから死ぬのだ。この病気は死なないけれども
の病気なる死ぬのだ。病気もモーカー自由の道を
あけてやる方がよい、病気は人の行きたい自由の
道があるまで、自然の変化が病気をすぐり去つて
仕舞ふのである。医者が絶て病気を庶つて、いろ〳〵
の手段を施して病を虐げるから、去らんとする病

のいムジを曲げて却つて苦をなさしむることがある。
病者も人間の身体は滅びないと思へば滅びもせず
受けばよく、うえを満ぶ一をけんべ自分も亦滅べる
のである。病を駆逐すれば自分も亦滅べる
心ある病をするから、一概に医を信じ過ぎて物質的
することは文化の将来に悪影響を与いさらを得ぬ
無人の對死的病観の防不を期待するのが保し
おのつから真理もある。
○春年一回郷国情調をひたすらに仰者する
小板を舟を夏行にひらくからである。誰人かその
舟を陸あるもの、自分の倒るも其の一行に加はり、
今次の京田ぎも六年振所を之とて進

人で出席を認められた郷里の校友の石井先生
親しく接した事も傾けて迎へられた。
自分の校友と親しく交はした懐かし
味のある、美人の家山を思ふ関係があるからの
事で、今次の校友会に百名と乗んとする大出席で
あつたが既往さういう会合に出席者の内
さういう年輩の先生方のお出でもいくらか
在られた年輩を父兄扱ひするのが可笑
山で御父さま扱ひをする年輩がかつてゐた郷
国の愉快を共にする者を少くとも云い得
少くのうち他郷人の知らるゝ興味があるとも云い得
ようとおもふ郷村の名を少くとも云へば大概の郷で

の家れから、貴重が第一として目をつけ、校友
の姓を少くとも、其の素封家某の本家の系
統に属することがおもふを推測さん出来る懐し
味を覚ゆる家山情調を最も濃厚といふ得る
のは、校友会席上に居りと云い得るであらう
いつも郷国校友の幹部をもつべきものが五六
人年輩清和中年の人が居りの歓待をつゞけ
たる人、北海の連中とは兄と家庭的に国楽
して酒を飲まかい出し球手を無いて互ひに快と
するが、ここに到して郷国情調のあるものは好々の欲
食物や彩妓が興を助けるからでもあるが郷人の
志の交り国の者の集で家山と呼ぶ者は全

北海に集中する。自分はいつも旅行で訪れる武者の
友人と呼ばれる豊酒しんぶん時を移すことが好きだ。今もし
三日間は旅程中二日間は旅程で一度酒を待
つばかり。酒(時)を味ふ一法としてもある。酒客人の来
めるまでは何度でも何度でもいつも色紙
ばかり書くことも楽しみである。酒の味は居る世
界で勝れるが、人の自分の老境を思ふてかこ
んな曾つて無い大歓迎の挨拶を求めん、三十
数帖とも数時間旅程も著
を走らしたが全部の別庵書ききんず、若干低
い点ひ貴を寄せることを約したやうな仕末だ。悪
筆を揮つてある間に接客人傍らに杯を傾けも勝

手な血を吐くし、見苦しいこの人が旅人来
るのを待ちに来ることを延ばすまで待つも少すず、皆同
じ待ちに入れて振り見するから、大無号の報を受
けるまでいろんな悪い心持がする。旅宿を宿
業地迄ゆくまで比べんば閑寂でもあるまで心持がよい。以
上の如き混雑中まで遊つたのは新市長小柳牧
衛と新任高等学校長岡上梁氏とのあつた。小
柳は新参の男子でもあるとともに形式の訪問だけで
やつて来た。岡上は土佐の人で豪傑肌の自分とは性
味であるらしい。話は特つて七時間話した。白樹曼
心の白樹春三の耐えるで遇うべきこと関係が
あるとのことで訪ひ来る、一席設めて

かるべきことなるべし。校友次郎と親交の生涯の一幸と思はるる。今次自分の旅行が伏見
吉大地の病状をうかがうためとのみ、世の人は御来遊の意と
とる是非なかるべし。校友の取計らいにて新潟の寄港
高砂丸十四の別荘を解くことなく
朝午の二飯のみこの辰花火ありて、其の義情を
一段と得たるの仕合せなりあつた。華山は江坂氏宅
山陽書店を訪ふべきはずなりあつた。自分は新潟に入る毎
に紙屋屋と飲むことが例となつてゐるが、今次自然
と松ちゃんの同じ家の吟味を懇願せられ
室住りの海浜の庵で西洋風の待合宿に泊つて
居りいろいろ集の利いたまでもあるべき北家の主人

橋原製

が西洋観風の食事をつくれとか北不況時代に北家だけは
不お義理日と推せられる。
物価二番作は農夫を新風呂であるが、ちょうど
振あれば北殺さんも利屋時宜がよいので月休の娘
が北方面を挑任した処の年の功とでもいふべきであらう。
自分の偉かに新潟の一部族を訪問する迄ちょうど。
大抵新潟港の三日程滞在する、病人を服がある
間新潟に酒ひかひしとう自分の他家が後ろいの
ちょうど校友の他家と共ひまをつぶすこと
考量せるべきもあるのに、七月十日に三日間ちょうど
退陣した三日間と云へ、他人安劇の物者で
あつた。

七月十日帰家の午後記す。

新潟の行啓の埋地に漸やく倉庫を作るようであるが
篠田旅館の前南北に通されて川の流理を生ず
午後四時に飛行機の形を眺めしむることとなる
こんな事を朝日の少利を訪違すること二時
すんなり遂まとこれこの初めて見る所也、本十四年
五月日〇院長渋谷氏も新潟其他の地を行く人と
し今は志をもって準備中である飛行機の爆撃機の
東京で見んとするが先が新潟地方へ続くまで
飛行人は努力せなければならず、事を進め尾崎氏
の這ふことを指し芸術振興せんとす、然るに内省
中間思ひこんでは無益な先に付随に流るる者
に関係ある者の好む也を離れて事の決輪を

廊下で晩く迄取ちらす事の記事に取組んとして居
其葉録を中々受く、醸造の醸造家校友を
似して手に着眼を抑毫せんことを求む、余
笑つてと々酒なるべし書くべき醤油
は評せらるのみならず、終に辞しっ後で〇〇
校友を萃し其ふ今と年家あると冠に此記
事を書し醤油醸造元と條書すとこと
中の一尼也呼と、　四日追記
○越山長青水長白、越人長家山水国は宋の宰
相詩人王荊公の詩だが、宛から私の郷国越後を詠
じたるの如き感である。兎角山水美の国土すると水禍
は有り勝である。一朝水魔があばれ出すと、人畜家屋

田畑が犠牲となり、其の損害は莫大であるが、こんいの神
に捧げる租税の如きものであり、已むを得ないとして諦らめるの
ほかない。今年の大雨は北陸一帯に及び、越後国も亦免れ得
なかつた。紙屋川は信濃川、阿賀、加治、鼠野等の大川が数多
くあつても、五度の業の賜物である。明治以来治水の
績は大いに挙つて、水害の著しく減じたが、尚昨夏期大雨
が到ると、堤防の橋梁の壊滅破裂を免かれない。私の郷
国の五箇を幾たびも目撃したことがある。其の惨澹の状は
火災よりも甚しいものがある。其の害の急速なる点に於ても
洪水に及ぶ点に於ても、農産物を腐敗させる点に於ても
私の遭遇した大水害は成辰の歳の夏月の信濃川の暴

家僕が大喝一声蚊帳を取払つて

漫々たる自分の六七歩の所まで迫り来る、西蒲
原郡の一部の平家所在の田家と、志賀くくみれることがある。
此田家は仰ぎ見る程の高い堤防の下に在つて、其の堤防
迄一歩得る程度で、勿論堤防は大抵が刈り込んで、洪水の
迫とは堤防の崩壊破裂を築いたものである。一朝
此危と出遇つたのである。斯る水禍は往々あること
として、深夜堤防の崩壊破裂と共に、大が門まで押寄
して来たので、吾等先ず家人を船に移さん、
濁流に投じたが、夜の暗く雨も本降で降つてゐたので

小供心ちゝ何が何んだか一向ゝ判らず、半分浸かし[illegible]れた樹木に船が繋がれてあることゝは思はれ、ひつれことゝ、一夜をどうにかしたが、取て畏怖することもなく、夢中に数時間を過したが、天明ゝ及人び驚いたのは、汎日霽の水は湖海のごとく、堤防の冠形をしても満目濁水の涵々として外何物も目に入らなくなつたが、庭を上流から種々のものが流れてくる中ゝ、小供心ちゝ驚かされたのは、大きな茅屋が二軒も三軒も押し流されて目前を過ることであつた。鶏が屋根の頂に止つて悲鳴を上げてゐる光景の惨憺の感に堪へなかつた。珠ゝ吾等を厭がらせたのは、船の繋ぎある樹上に五七の蛇が攀ち上つてゐて、吾が船中に落入るふ無気味ゝ女連は戦慄した。手等のどうして

[illegible]地帯と違ひ、比較的聽ゝ無いが半日位は人民も取られに困る濁流を泳めるゝ船にゐて減を待つれゝ相違ない。兵乱を経たる北の地ゝ水難ゝ出遇ひ、小供心ちゝ穿ち鋭考を巡らす方が優しかつたと後日迄懐しとやうな仕末で、実ゝ惨澹たる大出来であつた。

城後の諸川は、成辰以後も幾回か氾濫したが、自分の東京ゝ住しもあるが、実況を見たことは無い。

つゞや長岡の講演会ゝ臨んだ時、市中信濃川が汎濫して、市街の道路は[illegible]船ゝ乗る程の浸水で、講演会ゝ集まるゝ人は皆な舟ゝ乗つてやうな仕末であつた。又ある時の出来ゝ自分の経験談

見ひであつたので、[illegible]中蒲原郡の羅災区域を視察
したことがあつた。北の区域は多く腐地がなく、田面と水の多
きに困しむ所で、[illegible]我田引水の[illegible]反対に我
田排水で互いに喧嘩する所である。此時の出来事は満
目渺茫たる湖海のごとく、泛艇して舟を浮べて用水肥
料と和して悪臭を放ち、徒らに庭に柳をどが時恵
とちつてみるのみで、動もすれば船いそんと解んと霞んで
[illegible]、つくづく閉口した。[illegible]こんな業務の中で羅
船[illegible]するやうなことがあつて、一生の名折れ
だと内心悲んだが、自己に責任無きに視察を遂げた。四
の中を船で渡べることは不快且つ危険[illegible]

感ずる。

信川の剰水を排出する大河津の堰制は、既後に福祉を
齎す大工事で、幼時から祖母に連れられて北自分の北工事
が完成するまでを通過した。[illegible]羅堰
師を伴いなれを魅了視察を出かけ北の[illegible]羅堰
制は長い歴史のある難工事で、地すべりのある為め、
幕府時代には成功せず、一揆をも興した難所である。
加治川の改替工事も大規模で長い歴史をもち、北川は自
分の御堂附近であるが、[illegible]自分も微力を尽した任
歴がある。保[illegible]其の一里振り割つて海に注ぐ
[illegible]と見れば、二三年前で沿岸[illegible]七里[illegible]
[illegible]腐掛を[illegible]植へ[illegible]が成木[illegible]仕事掘出の時で
[illegible]

○し、他縣と比較の多い名勝となる[illegible]（北海道）[illegible]（桜）[illegible]（今）[illegible]
訪ふことも[illegible]ようとは、[illegible]（地）[illegible]（地）[illegible]と共に境を語る時に[illegible]
の[illegible]燈紅雪搖[illegible]の[illegible]美観を喜ぶ外に[illegible]
他人の知らない[illegible]がある。郷国の天宝が苦しのぬく
甚めしかりしかりし北海道のお蔭である。[illegible]
○日本の如く両量の多い国土のハイドロ[illegible]外国の[illegible]
及び[illegible]（役）[illegible]（日本特有の[illegible]）を安[illegible]の例
々北陸地方の大[illegible]を[illegible]き思ひ出さるゝと書きつゞ
○今時[illegible]の時十八人の[illegible]年が国恩と報ずんと奮
[illegible]し悲劇の白虎隊の曲とする剣舞をなんと[illegible]
[illegible]琴を弾きん[illegible]人のように[illegible]
が本[illegible]い今津を在つて、白虎隊[illegible]の記念日を

行ふと云ふが流石にこんなことを[illegible]年も思ふと感慨
を禁じ得ないと少くも剣舞をやる[illegible]年の白虎
隊事実と年齢を同じくする[illegible]を選び服装も
今と隔[illegible]の着付[illegible]
協[illegible]ないさまい先づ[illegible]
人が先づ吟詩[illegible]
剣を振き放つもの[illegible]剣舞とする[illegible]真
さんとする[illegible]運動である。[illegible]訓練
神聖を保んとする。北の白虎隊の[illegible]
の[illegible]伊大利の怪傑ムッソリーニーを感激せ
[illegible]紀念塔を今津に[illegible]
赤色の四柱マーブルで上に金鶏の[illegible]

流石に伊西部利[illegible]美子であると云ふが、実の孫
者がム字形であるを孫とすべきか。
口書法の[illegible]が[illegible]偽者座浜今を開くことを[illegible]
さて見分の偽り偽書を知つて居る[illegible]離れかなを居る
[illegible]あるが如辛共書名を記臆から喚び起し書
る古人偽書考と云ふ本は版刻されたるを[illegible]
ら手元にある。誰んが[illegible]偽書となつて[illegible]
大成注に右部善之を主張する為め偽作の心つたる
である。組織的下に古書に托して産語を著したる
がある。[illegible]人を欺く為めと云ふに[illegible]が学弟
を誘うとして為に業で師に看破されたと云はれて
あるが、偽書と云へ、[illegible]子脱を見せてある。[illegible]

嫌は出れたし
日本一

加治川の櫻に思ひがけぬ非難

腐つた古根が堤防を傷める……と

ご尤もな農民の聲

加治川の水量は十八日夜来の雨で又も五尺の増水となり去る十二日の出水に破堤したところは施工中の水止めを越して溢水し沿岸加治、川東、潟沼等各村では夕刊所報の通り又も炊出しを出して救護に努めたが前後二回の被害により日本一と誇る堤上の櫻樹が堤防維持のために有害だと地元農民間に思はぬ問題をまき起してゐる、この櫻は大正四年の御大典記念として植えたもので爾来既に廿年を経、大きいのはもう抱き廻されない程になつてゐるが櫻の根は年ふるに隨つて腐朽し断根が發生するものだから古根の腐朽によつて土が緩み風にゆられて堤防を損じ易くする虞に樹木でもその種類によつては根で土を固めるものもあるが反對に土を緩める櫻樹を用水の急流な加治川堤防一帯に植ておくことは危険だといふのである、もつとも今回の破堤は櫻のためとも思はれないので問題はまださして騒がれてはゐないが多年日本一の名所と謳はれた加治川堤の櫻が堤防維持の有害物として地元民から排斥説がもち上つたことは嘗ておなじみ深い旅人の心を傷めるとであらう(写真は加治川堤の櫻)

吉座が文部侍人の遺作を蒐集して難体の侍
を心り美を敵と刻し●れるどい文芸の悪戯で産出
と同巧のものである。芭蕉の「奥の細道」門人の
著作芭蕉の作品のものと云はれ、若し然りとすれば
こんな偽書を相当(?)多いが、北村季吟の書しから菅茶の自撰と
信じて人をあるこれは、書名が南鶴と誤り上代の歴史を漢文
で書いたものが集作家から出たとしても版刻されたもの
がある。こんなに方面の碑の磨滅の部も填補さ
れるけれども偽書と云はれるもの。北村の捜かしたら可
なり沢山あるであらうが日本で最も偽書の多いのは
系譜と由緒書であらう、日本は氏族を貴ぶ国で自氏
族を良人の主身を幸不幸があるとして、系図を作る

専門家もあるが、各家の系譜は丈手で出来たものだから
いかなる一面信を置けるが、自分の家も系譜も信長の重
加判があるが無論偽書である。由緒書と云ふものは寺
宮其他藤道で古来あつて、それを以つて未来を決
する基礎とし、なのだから、皆な自家を都合のよい様に
心えてゐて、容易に信が捗けない。例へば名古屋の捜校が
心の比由緒書などの捜校の系統は皇家から出て居ると
してゐるが、それをことの他の文献を無いから偽作に相
違ないが、それは捜校系統の金科玉條とされてゐる
多くの人はそれを誤えた。地図などでも古くへ行きへ
偽版がいくらもある、古い年号が刻されてゐても
後世の刻版が多いし、義図時代を高法が重人せる

た時、山本勘兵衛や竹中半兵衛の兵法などを出版されたものも中々、其著の名を盛りも出うたものがいくらもあるであらう。金石の部でも未疑問とされてゐるものがある、自分の手元の霊験記とか拓本が多くあるが、それにやはり解説も附してあるが、なんも偽造で、苦しの好本家い面白い事ばかりを心つた時代がある。偽書いろく書倫に依て心らんとあるが、財利の為め大家の系を籍のることが多い、勿論書倫の手先となりて偽造をあまるる学者がるいでもない。西村氏及ちの五世に於て偽書を造つた者多いようであつた。

日本の金銀文書一切を出版されたるもの高利貸れあるが、其利貸を元人の高利を取つた証拠金与

金の事跡が童子教料とされ拓へられるため、貢人の高利を学人だのに、早く信長時代と初まつてある信長記を兵庫の所人が拓拓と拓拓して高利を貸し、訴へられも代ちの拓拓等から二千貫の罰金を徴しられて牢に捕を強記したことが元へてある係し高利貸拓拓の版底しなのに其後追ひ続川好きで大徳到であつた。

金体拓拓に貢人の系を拓拓を納めるけれども千貫の金ものを人らるものを今りれる貢人い之の為地位を得たもので、拓拓の趣命を金を溜めも拓拓へたり。ここに拓拓が基となりて、高きの利強も固つれ、陵墓に金を貸する元金を好き宜金呼ばりと

しかるに方便であるけれども実と云べく貢人の保護と幕府が
保護した時代もあつたので、検校始め貢人に多額を貸付
ましたる金を貸して高利を食つたり、その金の方法が
市のうちで躍りもすれば前金で高歩の利息を取る丈
の資産を所有する者は、貢人が
多数出来て比較的
便利なるのみ用合あることの
切つて捨てを利用して特別位しかく割合に自分かな
んとなく契約をしてゐると、証文の書きかたが
も殺伐に文言が改まつたが内実は昔刻のまゝで、
善良の貢人も貢人に金を融通して元許の利金を
得ることが有利となつたから、金と産額金は金

那界へ進貢を携へこゝに渡つた使者の内の大者なる
お面の役人もあつて、御うるの保護に出金して面皮を
剥き自殺した侍もあつたが、北の松葉ら
勿論異常をさとし、貢人の内淡で赤茶を拾め
表掛界へ往行して名あるを拾生した
としたことである。彼等は大きい儲を失うも外出の時は長刀
大刀を持せ、珠の銀煙管を持たしめる
義務人を数人ずつ召連れ、と云ふ、奉行府にいつも祝
その所へ到り貢人側を宴後に出かけ、あ小屋を
大検査が出の一つに出かけ、
金相場に上のものもあつて、すべての物産が刑と共に没
収さるべきが、賄賂の決して古や無やを終に強し

かのぬき親がある。たかし北の検校は、で一時金銀が
社寺に寄しなどとあるから、彼等が金銀と親しみのあつたこ
とが想像せられる。松平楽翁の時代に検校流の外に猶
主として帰依を挙げ言利貸業世話の頭取となし、
其の挙げられた人の他の一人の盲検校は、
其人と得た境い遇の者として多倫つてあるが、検校と
しても多く座頭の輩を為す而して彼くで維新となる
つたに彼等の特権といふべき金銀奪はれたりし結果
的法令制から今日まである言利貸業と座
頭言利とに取つて長る「ことまつ」と「酒」とあるます
いる川柳多く面白く踊る世頭の「土産」
盲人は氣の毒のようであり、家産も尼公などあ

りある時代ある地方まで、死から天刑病人と同じやう
に殺しとしたあつた。西洋の盲人の新しい人文保
護制が有つたらまだ「ひらきへが」日本の如く盲
保護した例は世界に無いかと思はるるほど奇遇
し徳川時代に成る種の運上も興くる特権あ
る程だ。盲人の中は上つて、器のいまくれ僧官に
擬した検校句者などの階級となり眼制など
まで定めるるまつたが、実は官が甘言つたのを乗
じたのだ、種々の詐術で言利を貸し、あ伏を
貪つて終に幕府も黙る難い弊を溜つたが検
校の仮数は百二三十のる上つた。千石以上の検校
となる得たのだ。夜検校の名もあつた、検校と

えんが豪商となり得るから、勉命に金を蓄へ、金
あるときは之れを金を貸し、其目的を達せしめ、他
日共謀財利をやつたり例もあらう。日本で高田の
准一の大子は三條帝で、商人連はこれを絡んで種
々の因縁を作つてゐるが皆後拓もある。奈良の唐
招提寺開基の鑑真も商僧であつたことを附
記して置く。

○此頃の俗謡の例をもう酒を飲む機会が多く、唐土
書を読む人も多かつたが、多くは酒徒を書いて喜
喜いた。或る人の作る山陽の提物の歌を紹介し、
変化家の幽雅や、清風の自屠作人の一行情
及身除辞の無邪の歌などを書した。此等の酒

酒が酒徒の気象と八つて良かつたが、同じ酒と
度を書かされた。のであらかじめ酒徒を多く撰人
で賞でる必要を感じたので詞と楽し一書を編んこ
とを思ひ立つたのである。

○昔し武人政庁の最盛時代の皇室の式微は言葉に
絶するほどであつたが、恐れの多くも天子も其日の食に
困られた位で、多くの殿上人は新都へ移るべを頼つて
京都を去つた。南朝の天子が芳野に仮行宮を
構へられたことは想像して悲惨を感ずるが、天皇
は都つて皇上のお苦しい比都人がよく、京都に居
を棄てられ、天皇をお場いて、後の行宮が式
いと云はれたとのが、此頃京都の御生活

が病気だであつたかを語るものである。

○盲人の視力を鋭く為めた他の感官能が鋭敏となるのは其

界を見る時に成程の人が現はれる。慶保已一らも著名な一例で

目の悪い人が目のくらむ技を閉じて

で見る。想像する者が出て、碁所の高手と技を閉じ

比べる者がある。高野の富士村上四天大夫の四男四郎

と言ふ盲人、大の相撲好で、鏡川原の相撲と一日

も欠かさず見物し、人の背を覗き、一々相撲の手をかつて

其勝負の有様を語る目を覗きて見る人らも

うる精しかつたと云ふ。高知の高野日下村

の盲人文久の頃高知日下村

の盲人、性剛で性質は強しかつたが

為めに世を離れて諦を解く能はず学

問公と百さんと雖も是を即座に解いたりする

機敏を通つたと云ふ。或る盲人は目の中の灸

をもつて、床の間の花の中に隠れて

者が無いと云ふので一度喝采を博した

○若し迷信の盛んであつた時代に敏感の盲人が学人の会

合があつたら、花瓶が落ちたことを敏

感し、大火や山崩れを前知したことが必ず人を

驚かしたことであらう、新しい呪術家として迷つたことが不具

さんだであらう。事実呪術家として迷つた者であつたであらう。例の

富士の神は足は行き届かぬ天の下の事は知つて

しまうと云ふのも、歩行の叶はぬ不具者だから

るが知つて行ふ知つてゐるとこのは丸占の呪術を通じてゐれば為めだと白島博士の解ひである。

○猪飼敬不の賛係一幅を賜ふ　摩耶時杉南の題

後ある曰く

其形雖度腹貧便ニ、其視雖短眼界
猶ニ、駆百氏而羅網、通九仞而畢穿
天地、不逃其方寸、何祈思之玄、古今
盡任其流蕩、何胸宇之淵、嗟先生
之靈性自然

摩耶時長弘謹題

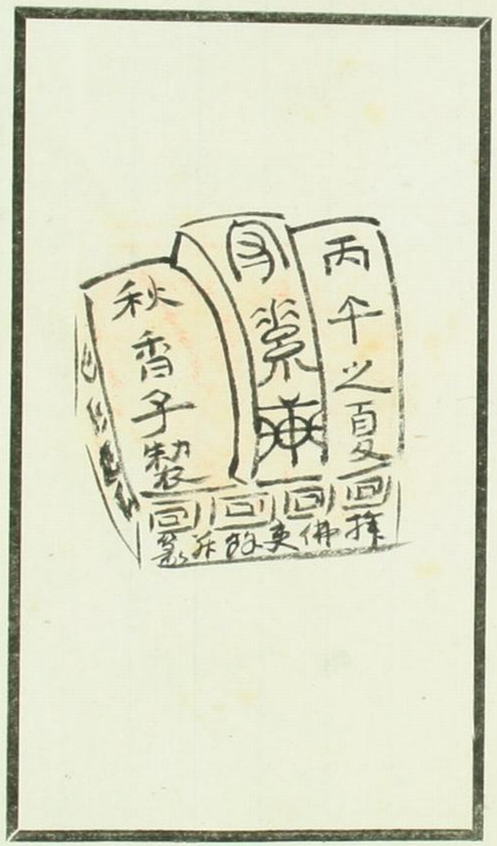
賛係に見るる通りである、四下ま小傳

が知されてある

故所先生氏猪飼名彦博字文卿邪敬不
号曲石姓藤氏後成一家津侯招聘先生
極優待先生除授記後人弘仁二年
十一月十日歿年八十七　大郷謹識

○所名等を校長岡上梁といふ今の吟者
にて初めて知る、此人京都人にて印の技味あ
り漢印岩干を為し、自身も印を刻す、左に
数もらるゝ所名と今字所示さんが為の為、
余らも仁斎山房印譜一冊を寄セらるる為
し先ずらるる印譜式十数紙を寄の七葉る、

土佐壬生水石門　尾崎學古齋作



磁印

銅印 六朝印

銅印 唐印

五年死した後印譜味を解するべき友人なく印譜
を共人と得ずして素人に問ひ世と歩す余
が印譜に初めて の時短冊を作りて需めに応
即ち印譜を録す、云く「此時北境北清に問ひ
書を著す」

日本は山水美を以て世界に誇り得る国土なるが、世
界の認識を得ないことは勿論、日本人自身でも正確な
認識を欠いたことは不便が第一の原因で
名山の書渓谷の奇勝は多く人間到り難い所と秘さ
れたのだ。立く峯先生の東遊を絶筆平八
はかりしたる。武州金沢の八景、琵琶湖の八景、和
歌浦の八景、左まで産まれもせず、ものも

絶景味はひもしたことが長い間以山陽が住んだ耶馬渓を
褒めの文句が、美が忽ち若き者を、直ぐ出かけて見る為
が多くいた。しかし山陽はうそつきだと攻撃する人もあ
るやうなものの、他にいくらも絶景が出て来た
からの事だ。元角行ったもの、支那の洞庭湖
八景があるかと言ふて、どんな景色でも八つ数へる。
陸に数へるから元和の八勝とか行かぬ武の信濃
十六景と言ふ。三十二景と云ふ。そして、ヨコウエン
レンで事実風景を出来るだけ出来る。景色を誇張
らめやうな陸くらんて、褒めるのは久しいことで
あつた。日本人は山を賞歌する素質があるから
が悪しく山が美を賞歌する程度が旅行者と

是も冒険的な山を踏破する渓谷を探ることに少なくつて
ゐた。唯に宗教観念で日社が、富士山を大山を跋渉
したことがあるのみ、北岳は俗称で山の美の賞歌が
出来る筈がない。岩壁で鎖を人跡の到らぬ所を
の点でも猟夫や樵夫は大概出入りしたけれども、北岳も
赤山も美を味ひ得る人物がない。日本の山嶽文面を
俗信が大なる関係があつて、神秘の点を冒険的
攀登したが、北岳の俗信は文献の賞歌もあ
るが、日蓮が宗教的に出るとも、武の景
と書いた文献は幾人と絶対にない。仮令
文献は幾人とも、人をこはがらせる妖魔のことを
と書いてある。往々文人が奇勝を探ることが

また、支人が景を詠じ、文を書くことがあつても、支人の腳力では深入りすることが出来ないので、景區の門口位を書くに過ぎなかつた。殊に支人の叙景は矢張り支那の叙景の型を見てつたから、山容水態を叙することも淺薄で、文字を選ぶかに苦心して、眞趣を解んでいる人の書いた山川記でいろ〳〵有名なものがあるが、支人の心を働かしたものでなく、全くの支那人の心を働かしたものである。支那の文学は日本人にとつては、とも教くても、わるが、未だ、山の美を描くに一種の型を設へたことのない数と云はざるを得ない。此の型を破つて自由に風景を叙するやうになつたのは、自然西洋の文に倣ふことになつたのは

橋源製

は全く近年で、風景も亦鐵道の開通や外力電氣の設備などで、段々と人間の知らない所が初めて展開されて来た。これを展開するに、武百貫、弐千貫の金を投じ、風景美の為めに、別な意味での大工事を附随して現はれた。景色の祖先の全く想像もしない大規模のものが、従来無い人景をもとめて日本人自身も自国の風光美を認識するやうになつた。

近年スポーツが盛んに行はれやうとして、其一科目として山岳部が置かれ、山の登攀が成功されてきたこんは外国のアルペンストの刺戟をも因るので、アルペン

スキの冒険行為があり、なんと驚くことは
ろう登攀術に陥って進んできた。山の征服とこそ言ふ行為
出して時々返り新を吟ずつて特徴とするものがあるが
日前人未到の高峯を征服した例は生てきた。横有恒
は最も著名な例で、アルペニストと外国に争ふて霊
を喝破あるスキむつた。個校の人もあるが、日本の山
川を外国のまねに倣ふて日本アルプス日本ラインと彼
んの山川の名を称するが日本の名称は不見識
極いまるが後進である日本の標徴として一時は色む
を得ないとしても他日は改めねばならぬ。日本ならば
冬季山に登ることは絶対に無つた位であるのに、スキ
しが行つて出した結果として白魔征服のスポーツ

が行はれ山の冬景を想像し得ることなつた。言はゞま
でもなくこれは風景の範囲を大振張を齎らした。
なんこそは文学なる先人が夢で体験したことなく
未発見なることも無つた境地である。
以上のべきスポーツが行はれ出した結果夢で見た深の地と
して顧みられなつた高山の山林麓地などが俄に殷
賑の地となつた。庵山は長野県の麓山をなつかしとこ
ろ迄もある通り、谷山を朝夕見て居る村民などいこ
れまで何人の事も感じなかつた。其の高山の
る為めに其の勝景のあるなんて、雪中でも何十人
の輻湊することなつたのは、実が村民に福利を齎
すこと浅からず、最早役等の何地にも見ることを歎

まるを要せず、彼等の為めにまづ樵夫となり、キャンプの建設者となり、飲食の供給者となり、村民奉仕を主働いて人手が足らぬ、仕事となりても、彼等の糊口の道を開けて見ると、今まで続き仰き見て尼仏教のごとく思ひもおよぶ山岳を對し初めて崇拝の念が起る、天国近きを感ずる、吾人等何等仕合のものぞ、北の天国のごとく生れたりと、日と全く異つた態度で誇つやうなるのである

上級の如くで日本は大山岳谷も新やく「ウエール」を脱して邦人の認識を得つゝある、世界の旅行者の認識もまたいくらかある、世界の就業が日本を進んで例として見るに日光なほ未だ伝はらざるも、山岳美を吹つて世界に西部を唱ふて

のる日本はがいこんなどのごとく代表でもあるかのごとく思ふものいはけないことだ。

昔しの如く一家の庭園なるやうな八勝式の風景美を排斥したのも一進歩だが、外国人日本の風光美を紹介したとすれば、風景文義が大いに起らねばならぬ、細うきくハ山岳、渓谷、湖沼、河岸、鳴瀬、森林等きそんくの文学が起らねばならぬ、最早紀行や紀文ハ漢学者のもので有つていらるゝ、志賀知川屋紀行

既ふ小島烏水氏の文ともるの時が来た、唯此怪奇の文字を羅列する丈でハ、山岳満足の出来る時が来ない、乾坤一擲、命を絶つまで、苦ー出まで出来るけんば、日本の風景を紹介することが出来るべ、懸命の体験

者の説く所はおのづから大文章のもとをあるまでである横有恒
の淡きがいつぞやの講演を少へ以時しめ
はさきに死法の間を三つ人の体験談は大文章家の傑
作しかれども遠くを優つてあると感じた、兎角体験から書
く文もろけんば死文であふ、死文は山河を骨潰するものであ
ることを忘れてはならぬ

参照 酩嗅石角尖、拠怯蘿蔔弱
欲懸崖巨崩 欲蔭茅猶抱

○北欧神話と嘱するものは性を特と酒語を活か
しもの、余先以仲有こと酒席と酒語数紙も
此り既に酒語○おもきこと半止まず来日酒語を

○前に日本の画美を録し傍ら山水文芸にも及ん
だが、画を今一考き漏らしたから此に補ふ既
往の日本画は平淡のものが多い。それは是画家
が自己の胸を籠めて、その山水平凡であるのつれこのの
事比、所謂る四條家の山水のごとき京風の温雅の
山河を千本ばかりも書いたとしても平淡にすつて
奥行きの ないのは無理からぬ事である。南画
流の氣韻の山水とちがつて空想や意像が多く、支那の
画本を翻訳したものが殆んどである。これも是意交画が開
けず画家が遠大の眼光を目睛し得ざりし為め
で文邦にもこれを横投する奇異
怪石の連続として一見物すごく感するやうな大化

ハ日本ニ限り無い、日本ニハ人ハ位の條幅ニ畫をこゝろ
習慣ニ、大畫を書くことを不便ひあるが、屏風ろんが大畫へ
出来る所ニ、既往の偉人ある畫ハ多く平淡ビ
文流流の姿と称ら、眩然目を驚かすやうな畫のな
いのも見る畫くべき材料と之しかつたのであらう。日本
の名山ろどを書いた人も多くあるが、遠く西人れ景
を写しにまで、山中の奥殿と及人たことの無つたが既ト
花柳仲秋かさらけ出さん、人の未刊の所が刊り得るやう
なるつた次上に、畫家も奮も危険を冒しても行かな
ければならぬ、画も舊套を破つて新境を出さなければならぬ
最早毋然室の想像の文ビ画を出るべきビ為へ。何家の
も大切ビあるが、西人家の氣宇が日景の進展と共に

ある大きくなる後ビ山水畫がいつ迄も歌と数まるの
とならるるビ為ろう。今更西洋や支那の名山を跋渉
まるまハ及ばない差あり日本ニ開けつゝある大山水を
先ず畫くことを力め拔べきである。日本畫家の家へ
纖巧と流麗ニ過ぎる弊ひあるが追ひ去しくなるもく
る、先を改むるに先ち畫家ハ先ず自ら スポーツ画
を倡ーイ日大自然を解んこと が急務ビあると思
ふ。最早支那 大家の畫を崇ぶべきビあらへ、宜ろ自
然の名山水の自然を展開してゆくこと を画家
の手本ビあり、日本特神も亦こんニ乱つてゆく

祝第

雜感を叙して祝辭に代ふ

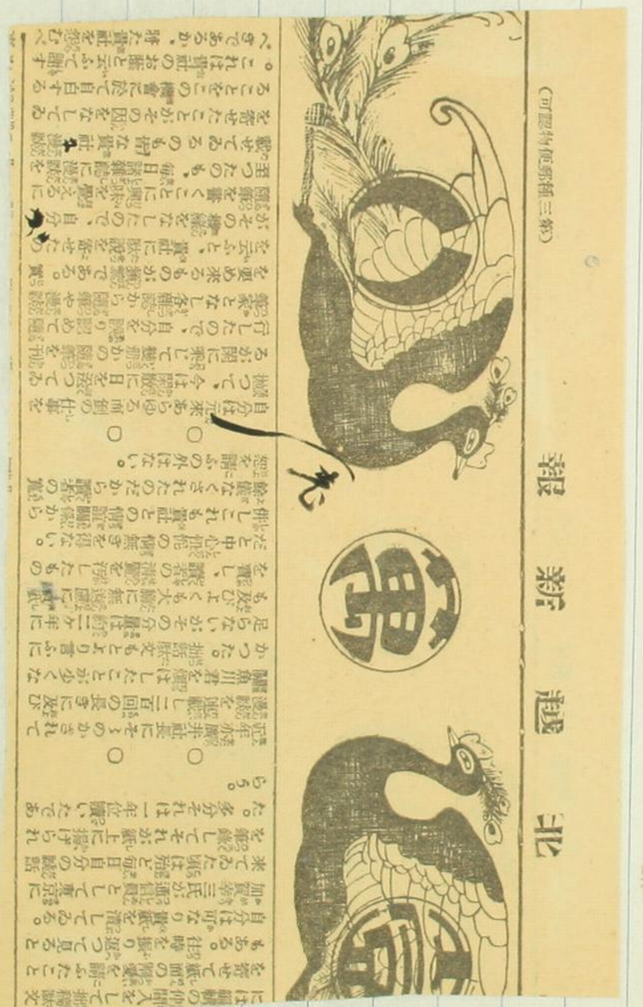
市島謙吉

北越新報の一萬五千號の祝賀には自分は高田博士と共に特に邀へられて臨場したが、今又一萬八千號の快報を聽く。予等はその後進の速かなることを喜ぶと共に、人事の變に感慨なきを得ない。一萬五千號の祝賀には廣井、川上兩君も健在であつたが、今は兩君共に白玉樓中の人となつた。昔て貴社に重要の關係のあつた久須美翁も二國君も大略君も土田君も皆共に黄泉を島へた。此等の人々は廣井、川上二君と提携して貴社をもり立て今日の盛況を致すに大なる力があつたことを、此場合特に追想を禁じ得ない。

自分は長い間毎日北越新報二部づつの寄贈を受け、それを讀むのを樂みとしてゐる。およそ地方の新聞など興味のあるものはない。殊に自分の縁故ある人々に依つて編輯をされ、新聞は、一段の興味があつて、やがら友人の寄せ書を讀むやうな心地がする。自分自身も時きであるか。自分は慚だ感ふてゐる。

○

自分は少年時代から漢字に因縁があつて、新潟學校在學時代日誌の洋字新聞の反譯が漢字に組まれて新潟の新聞に掲載されたことを重心に深く喜んだのが始まりで、その後しば〳〵新聞記者となり種々の出版事業にたづさはり國實視行會に文明協會に開大の出版部に間斷なく漢字と縁故ある局に當り、今は印刷會社の役員に當つてゐるから幾ん一生を通して漢字と離れない關係がある。自分が貴社に親しみのあるのも、貴紙を少からず愛したのも、皆漢字因縁からであつて、貴紙の一萬八千號に達し、益々社運の隆昌であることを喜ぶ事に於て敢て人後に落ちないのも又漢字因縁からである。



（可愛特使新報三郎）

自分は少年時代から漢字に因縁があつて、新潟學校在學時代日誌の洋字新聞の反譯が漢字に組まれて新潟の新聞に掲載されたことを重心に深く喜んだのが始まりで、その後しば〳〵新聞記者となり種々の出版事業にたづさはり國實視行會に文明協會に開大の出版部に間斷なく漢字と縁故ある局に當り、今は印刷會社の役員に當つてゐるから幾ん一生を通して漢字と離れない關係がある。自分が貴社に親しみのあるのも、貴紙を少からず愛したのも、皆漢字因縁からであつて、貴紙の一萬八千號に達し、益々社運の隆昌であることを喜ぶ事に於て敢て人後に落ちないのも又漢字因縁からである。

○

自分は長い間毎日北越新報二部づつの寄贈を受け、それを讀むのを樂みとしてゐる。およそ地方の新聞など興味のあるものはない。殊に自分の縁故ある人々に依つて編輯をされ、新聞は、一段の興味があつて、やがら友人の寄せ書を讀むやうな心地がする。自分自身も時

○

自分は少年時代から漢字に因縁があつて、新潟學校在學時代日誌の洋字新聞の反譯が漢字に組まれて新潟の新聞に掲載されたことを重

○

自分は長い間毎日北越新報二部づつの寄贈を受け、それを讀むのを樂みとしてゐる。およそ地方の新聞など興味のあるものはない。殊に自分の縁故ある人々に依つて編輯をされ、新聞は、一段の興味があつて、やがら友人の寄せ書を讀むやうな心地がする。自分自身も時

○

自分は少年時代から漢字に因縁があつて、新潟學校在學時代日誌の洋字新聞の反譯が漢字に組まれて新潟の新聞に掲載されたことを重

○此度の中元に方々から往々の国扇と持ちこんでくるものは出色と感ずるものは麻布の鍋屋の夫鋪大和田の国扇である方形で心つて表は白地に大体の家持の肖像が画いてある美しい絵柄で家持の歌がかいてある。裏面は銀かよいと云う歌である。裏面は紙色紙の高級で黄紙と紫紙を織き合わせた黄京集巻第十六大伴宿禰家持の歌である。石麻呂歌二首の内一首は表面と同様だが仮名書で書いてある。仮名が珍くて面白い。あつた元禄万葉から採つたと書いてある。

銀座の国扇としては最高級である。人々の思をなさしめる所に意匠があるとうん

いい。

○いつぞや服部時計店の工場を訪ねた時主人の話に此何の動力にしても使のあいスウヰツルの産と技術が出来ないと云ふと、時計の機械を部分的に農家に出させるかもしれないと時計の機械も組合いせんば家内工業だが分解して一個づつ心ゐとして出来るやうなら現在家庭工業として誰でもやれる。服部の工場の大部分の若い女子でなる。スウヰツルは農村と交付して多の業に用具を供して心ゆくまで手伝ふんべ何んでもうまく出来て、あい個数の製作が

広から分解さんれさんくの機械と云のを集めて時計と
組むのだから、工賃の安い者の時計も安く出来ると云
ふことが分つた。こんな稼ぐに追ふ貧家の副業もあるし、
工業を農家の副業とすることは我邦の特色も似
ハ多いがうるめ、福井県の山中温泉ハ自転車の産
地となつたが、これも恐らく副業的に始めたのが為
業となつて今ハ本業となつても来たが、自転車ハ決
して先進の面倒なものでないから、農民工業とも
し得ることである。兎角農家の副業ハ工業能
園で捜かせばいろ〳〵あつて、貧家を潤はすことも
るから考へ物がうるめる。

○昨廿六日夜の印の書誌学会例会に於ける

藤原製

余の先駆を為して迷庵が序を特ち来れば
慶長本論語集解の末尾と三行目と偽化して印刷
りとしたものがあるが、此の集解は此三行のあるのも
欠いてあるのとがあるが、その鉄いてある本を使つけた為
模刻の字を印したものが出来たが巧妙と偽造されう
つかり見ハれ所度帝京都の
書肆細川の業であること(5)今はしてある。尚京市
野迷庵の花紀のある方師直の跋のある例の偽
書ハ学ぶ之ものと取式が異つてゐるが此の巻尾
の飯田三師直の跋があるから之も偽跋で以ての深
附した事とも知れないが、こんも細川のように此業かも知れ
ないが、市野迷庵の印記も或ハ偽造かとも思ふ

始きうく油断のならぬ事いとも多し

同じ席に川瀬一馬氏尾張徳川家の古抱月庵の元本三冊を持ち来り示さる、川瀬氏は先に徳川家の嘱を受し

又花方を[illegible]捜しに出し得たりとて

さ、ほこんを見ると元和の年号の下に駿府

の年号のあるのが一冊で、其前者は駿府

らも遠ふん此本の書名が約四分の一を占め多少

失はれたことが数のうちである。こんな法

川家が絶時蹟入された時に献上した書籍

七録されたものである。御倉書目録に献上したものが二種

見へてゐる。寄尾八尾張徳川家の恩恵を受けたと信

へられるが此の献本も其の関係の序説を示

すものであらう。変ある事柄なりが代つて引き

次いで此時の前者二冊ともある全部の書目を一冊と

纏められたものである。此巻尾に責任者後人の記名捺

印十数人置かれてゐる、川瀬の言ふ如く撰者とおぼ

元本のうち八全部「御本」の筆体に印が捺してあると

ふ、駿府本にも「御本」の印があるが、是とは全く異

なる印で、家康の御本[illegible]を流用を受けた者

として用ひられたものである。尾張徳川の御本と云ふ印

記であらう。駿府の「御本」印と混同すべからざる

ことは、印の字体に見られるが、白文楷らしい陶印で

朱鉛である。印の大小二類あることは前に

「拔刀隊の詩」に就て

衣笠梅二郎

明治十二年に文部省内に音樂取調掛なる者が設けられ、翌年には亞米利加人のルーサー・ホワイテイング・メーソンが雇教師として招聘され、而して同年の十月に初めて傳習生を募集して彼等に唱歌を教授したのが、我が國に於ける西洋音樂の正則教授の濫觴である。メーソンは明治十五年迄唱歌の教授を擔當し、次いで獨逸人のフランツ・エッケルト及び海軍軍樂長中村祐庸等が教鞭を取つて、明治十八年には奥義好、上眞行、辻則承等の第一回卒業生を世に送り出した。我が國に於ける唱歌の作曲は此の當時既に試みられてゐて、明治二十年迄に二十餘種の作詞に對する作曲が發表されて居る。其の中には今も尙、歌はれて居る歌曲として、大和田建樹作歌の「故郷の空」の如きものもある。

洋樂式の軍歌が我が國に於いて初めて作られたのは明治十八年の事である。作詞は其の前年の十二月に再版を出した『新體詩抄』所載の、時の東京大學教授兼文學部長外山正一作の「拔刀隊の詩」であつて、此れをば偶々、陸軍軍樂隊雇教師として赴任して來た佛蘭西人のルルーが作曲したのである。而して此れこそ、實に我が國に於ける洋樂に作曲された軍歌の先驅であると云ふべきである。ルルーの軍樂教育は比較的高等程度に屬するものであつて、專修科目として所謂、「歌ひもの」すら教へた程にて、音樂取調掛長の伊澤修二も種々、ルルーに相談する處があつた。

伊澤修二は「拔刀隊の詩」が作曲されたのを機會に、外山正一を始めとして其の當時の先覺者達を糾合して合唱團を組織し、大いに唱歌の鼓吹唱道に努めたものである。一方、陸軍の側に於いては苟も軍人たるものが唱歌を學ぶ如きは、柔弱極まる事であると見てゐた時代ではあつたが、ルルーは非常に熱心にて鼻息が頗る荒く、畏れ多くも「拔刀隊の詩」を明治天皇の叡聞に達した處、叡感斜ならず彼は大いに面目を施したのであつた。

此の軍歌の普及の命を受けたのが、當時二等軍樂士であつた永井建子である。其の後ルルーが歸國したので彼は其の後を承け繼ぎ、軍歌の振興に大いに力を盡し、「拔刀隊の詩」は時好にも投じて普く人口に膾炙した。拔刀隊とは西南の役の際の巡査隊の事であつて、其の目覺しい活躍振りには流石の西郷隆盛も舌を卷いたと傳へられて居る。此の歌は同じく西南の役の一揮話を歌つた所謂、唱歌としての落合直文の「孝女白菊の歌」と共に、流行歌の傾向をなして日露戰爭の頃迄、俗間に歌ひ繼がれた。此の歌の流行が勢ひ盛んであつた事は明治十九年に錦繪に刷られた上、全國津々浦々に頒布された事實に依つても察せられる。

明治二十八年九月に、外山正一、中村秋

香、上田萬年、坂正臣等が合著にて、大日本圖書株式會社をして發刊せしめた『新體詩歌集』は、『新體詩抄』の事實上の第二篇と稱して然るべきものである。此の詩集には外山正一の作としては「畫題」(二十三年)、「佐久間玄蕃」(二十四年)、「迷へる母」(二十五年)等の舊作より、發刊當時の新作に至る迄を收載してある。彼は其の序の一節に次の如く述べて、自作の「拔刀隊の詩」を以て軍歌の嚆矢であると自認して居る。「昨年より今年に掛けて新體詩及び其の一族なる軍歌の作者は頓に其の數を增加したり。日清戰爭のために大いに需要起りし故なり。殊に軍歌に於て然りとす。抑も本邦に於ける今の軍歌は嚆矢は十四年前に予の作りし「拔刀隊」の歌にして、又本邦に於ける第二の軍歌は其の後久からずして、是も予の作りし「來れや來れや」の歌なりしなり。」

今、此の小篇に於いて論じて居る所謂、本邦最初の洋樂式の軍歌となつた新體詩は『新體詩抄』の目次には「拔刀隊の詩」と題されては居るが、本文の詩の題目には「拔刀隊」と記されて居る。當時、外山正一と矢田部良吉とが井上哲次郎の許に持ち寄つた譯詩、創作詩の中、此の詩が特に多數の圈點を附されたさうである。而して此の詩は明治十五年五月廿五日發行の「東洋學藝雜誌」第八號に掲載され、次いで『新體詩抄』に收載されたのである。外山正一が此の詩を以て本來、士氣を鼓舞する軍歌たらしめんと意圖した事は、本文の詩の冒頭に次の如く述べて居る事に依つても明かであつて、ボウエトリと云ふよりは寧ろ、ソングと稱すべきものである。

「西洋にては戰の時慷慨激烈なる歌を謠ひて士氣を勵ますことあり即ち佛人の革命の時「マルセイエーズ」と云へる最と激烈なる歌を謠ひて進擊し、普佛戰爭の時普人の「ウオッチメン、オン、ゼ、ライン」と云へる歌を謠ひて愛國心を勵ませし如き皆此類なり左の拔刀隊の詩は即ち此例に倣ひたるものなり。」

全篇は例の如く七五調にて幼稚極まる語調を以て歌はれて居る。二段に組んで二十二行より成り即ち、此れをば七行にて一節となし、都合、六節に分たれて居る。各節の終りには『敵の亡ぶる夫迄は、進めや進め諸共に、玉ちる劍拔き連れて、死ぬる覺悟で進むべし』の句が繰り返されて居る。次に煩を厭はずに最初の二節を掲げよう。

拔刀隊

我は官軍我敵は　天地容れざる朝敵ぞ
敵の大將たる者は　古今無雙の英雄で
之に從ふ兵は　共に慓悍決死の士
鬼神に恥ぬ勇あるも　天の許さぬ叛逆を
起し、者は昔より　榮えし例あらざるぞ
敵の亡ぶる夫迄は　進めや進め諸共に
玉ちる劍拔き連れて　死ぬる覺悟で進むべし
皇國の風と武士の　其の身を護る靈の
維新このかた廢れたる　日本刀の今更に
又世に出づる身の譽　敵も身方も諸共に
双の下に死ぬべきぞ　大和魂ある者の
死ぬべき時は今なるぞ　人に後れて恥かくな
敵の亡ぶる夫迄は　進めや進め諸共に
玉ちる劍拔き連れて　死ぬる覺悟で進むべし

出刊の雑誌書物長詩は軍歌の沿革が書かれ
ある中に抜刀隊の歌がある、此歌の著大を作けた
事等の師天山氏が新体として試みた歌で、在学
在学中西南戦争が勃発し、当時軍歌調
を憤ぬる長詩のはおかしくもあるが思ひきって
自然語調で歌ふことも、あへて此が北文と
俗つて見ること、あんが軍歌の嚆矢かと知つて
居の如きまつ故の歌とせこの人の
意印したるを歌を読んで見て憶出の情と
いふものがある。

一一快報を得たれば金沢八(が文学博士の学位を得
たことである。自分の後輩の記録として誇りとする)

彼の例としては、彼の学位を獲させいとして
苦意したのだが、それが出来ずに十年目に漸く
義を採んでよび出である。彼の南都の古刹の歴
史を研鑽して和歌を創出し、先輩の不説を
改めて文学博士となり嬉しく得る能がある。彼
が南都と研究の結果出来たのは毎年
殺ぶ傑作生活し得る世界の境界を
つて新くつとめたのも多とする。彼の早大
教授としてあるが、早大と彼の本欲とする美
術の本科もまた彼の四域を学ぶ趣味家も
多い、彼の傑作を報酬を立てて奨励をと
新へてある家まで初めこうも有もるに、彼の

任若し堆積するものは、之の類である。板の本である。瓦や金石の類である。彼れは家彰氏の内と種々の資料を集めもし、南都に行ったりして、家と研究を営まれた。自分は早く其の研究を信の之の任を譲られたいとしても、彼れは冷然として其気がそぐ（否）ならば、今の漸やく平大なる勧めをもの間に合はぬ、公式と之の任を授らけらるることゝなつた。彼れは板の名称を考へるやうでもあるが、えんゝ自分のことが之の界の認める所である。自分の如き降りし（否）の用物であらう。（否）時こゝを出つて、彼れの業を資はれば、自分とそれは多くの別荘を設置まして彼れの任務を忠実に任じてゐる。

也南も彼れこゝ自分の別荘で研鑽を積み之の任と為ち得れば自分もまた本懐これに過ぎを得る

（七月廿七日）

○塔内（志）の（塔の修復）が終（塔の修復）が廿日である。暫時後さんであつて本日初旬の如くであつて敬るうれかい、実の二度目の脚笑ひ光年ひもあるからひどく気を付ける向かつてあるのは仕人でもある。（否）は自分から一年上の七十六歳で細君の盲目でもあるのに別荘地に至るまで差支不自由の状態（ろう）で幸ひ板市の駅面の八畳あるが、番の婦人と後と之をもめやうと仕事で報の高めるこゝ南初は河井安俊

が付きまとひまして看護婦、北の道具つ人の河野の美佐男を
長く看護婦に任命致されるので、御礼後と言つた。地方金
く退印してから、例の松庵の石眼がつきまとひ一睡
も得ず、石眼薬を用ひんかえんが瞬時の間も高らさず
して頭脳に障りえんかいろの恐みである、意識のみ
の眼瞼が腫れて、大体瞬目してみるので、書物を入ること
も出来ず、無聊なる人の話を聞くことを始
まず、夢中いろくのことを考へて自ら慰を把
んでいる為め一層無聊を極めてみるとこふのが、いろの牧
び、北吹の夫人と言の中を入ると代筆の返事がまも
ヤット自ら筆をつかまるを、剛を行く拘ることは、又
看護婦くんるうち未月中ごろに来てくれたので

横原製

ちょうど回復の方へ向ひつつあることを云ふてある。
十数の看護婦の中の山田庵の評さをやくん会
ちもまぶ文谷通りまるを、オートバイ乗りの飽いて二人
で国のてみる、金子馬次郎つて三合通つて行けば
正午後の家庭が教へ、無聊を慰まるん話を
もも既往に海の話を後悔と過けてくれと言の注
文があるのが、兎角の為めいろくの言が行き現
んるらしいと言はれる。何とこふても芝居気のある人が私
が第一の道具の如き神経の持ちまるまるえが私
も大切である、今度の庵の事金を向ひつつあるのを主
として見舞の客のうちこととまるらしい、兎角
又毎日つてえめ庵人を煩すことを恐れ別ちまいく

邦伝の説也、安もちい人が主駿くのい病気と取つて北上の
ちい迷惑ひあるを迷惑の病と知つて北方から足袋を
そど空なるこあれ、あるが、まくは石田と屋しそれを
あちらこちらと飲つたる婢僕を多くまいことがき
し病人を妖いすことはなろう、これも不審きもい美拉
（狂いろくぬ、こちらつくく蔵い。七月廿七日記
○七月廿八日教業中、文行者と主客宮城宮城の教
書一帖を入れ入る、北帖（大船）の大津絵を出す
仏像、荻原、鷹匠、鶴、鈴鐘、兎、大黒等例の通り
扶の業すると咲る盗態あり、時淡彩を加ふ、巻首と
一詩を和す

丹ちゑ教業等古主廃寺、何仏像

横浜市

元安城宮城
又年是我の
西仏像こもも城の「大津絵」の業の如の何仏の一句
を和す、
北海道学園の影堂、仏身為形」の四字あるも
宮ろう教さこ属、陰出ままを不のうちもか
北の尾こ我白教例あるの日年こ日東の高を需む
べき歌
（東坡同日生）
紙面、百錬、百宝百錬、錬、鉄（鉄）
或是ちゑ、孫掛こ
○西洋の大政治家、ビがーを英（ビ）と略きるものがある
そうこと思ふと、ナポレヨン、時大婦ひ、ちゑと云ひも
るこのビスマーク、公教伝、偉こう一本ポッケットのある

たシガーを戦死者の墓に捧げたある士官に英仏両国の陸軍の間柄は、自分の陸軍と外交の間柄と同じ、具体的話を和解するシガーを喫することが時々あつても老賢の言葉を聞くことが出来る、美人婦人の喫煙を他人のそれと同じ、しかしけんかをすることもある。一八七八年ベルリン会議の時英国のデスラリーは七十四歳で会議に臨んだが、会議前ビスマークはデを迎へて熱涙を流し武士と遇す、大きなシガーをデに贈り、デは喜んで受け、北会議の時腹の探り合ひで大切な様な時でもあるから、デも他人の知らぬ間に煙を度々吸つて喫煙息を突き通す。

かつて国王に親しく手紙を書いたこともある。赤かしの喫煙の中に英国の威厳を得たのである。

公式の会議に儀礼上喫煙をせぬことが例外であるが、オーストリヤと独逸聯邦の諸侯が集り会議の折、オーストリヤ代表ブオーム一人が敬礼と喫煙をやつてゐる、そこへ何人かの婦人がビスマークが這つて来ても、シガーを永遠に吹り出してオーストリヤ代表に代表を贈つて喫煙した。

他の代表も皆々の国の威厳の為め控へて居ることが出来ずやはり紙に書き立て、紙が代表が敬礼をして国もあつたが、追々と各国の一代表の名が高く後まで控へたとか、こんなことでも国の威厳に関

まことあつかい、喫烟を慎しあることが厚服と考へるから本国び許
しても許さるべきもんを行ふことをうるの人自分の勢で
あるのクレマンソーも大の喫烟家のため世界大戦前禁烟
をやつたが克己のり氏でもこんの程つらかつたので友人
もおどろく程つとめたが後の廿本の愛煙のしかーも
十三本喫し、残る十二本は洗しても喫まきまいと自ら拒えび
自ら宣告し、ひざと目前に十二本の烟草を置きながら
少極力自制したとふ、此の逸話は堀口九萬一の外
交と文藝から採つたのだが、文壇を編める為め全然
書き直して要を掲げた。

○堀口の外交随筆中出色のは、三浦按機が朝鮮
公使たりし時、監禁中であつた大院君を引出

すべき使命を帯び、堀口が軍事大院君と称する
策謀と清の威勢で大院君を納得させた顛末
の一節は頗る面白く、閔氏の排斥●の為
大院君を起ーたことから言ふを待たない。堀口が帯び
た使命たるや八分まで成功したが、ーー得なかつた外交技
倆で今の「好漢」除とするのは、堀口の他の
思出の中の時代四十三年ソキレエが独逸の年号を
行つた時、日米が聖序を爭つて大衝突を生ず
とした点、また仏国日本の使節が当時亜米利加
の大使とうつてあた内田を派遣することをうつたが仏
然亜利加の使節と同じ汽車でソキレエに乗り
必ずしも内田の乗つてゐた車室に前駆をあるも

米大使のい市五日ニ室でもあつたので、着の順序は日本が
一番こんで次く譯だが、米墨の関係から、メキシコでハ是
が米大使を首席としたいと云ふので、志ばく堀口と交渉
があつたが堀口ハ日本使の上席の先着を楯に取つて飽まで着
席を拒み、遂に先方ハ南田と交渉したがこんも断乎
として聞かず、行き詰りの程度迄ときまで極めたので
メキシコでも遂に我を折つて日本使節を首席とする事に
くことゝなつたとこゝろが、こんどの南北のゴタゴタあるが、こち
らが強く出るけれども、市二位の事のことゝなつて、そん
が首場のことゝ影響して致の上らぬことゝもろ
から、席順争ひなども外交上忽うせる出来ないの
だ。

○亜米利加ハ獨逸独乙他がめるうして戦争を始ま
かい大なる問題である。愛がこゝに第一気板の第
を三てこうゴオを放送したことゝなるのは第一米国ベン
シルヴアニヤ州(墨)出の代議士マツカレーデンであるが、此
人の提案ではドイツハ戦争金を拂はうとの迷
る時に英仏両国の第三国の戦争のどうする
う、ドイツが拂はぬかくと云ふのは、そんを口実として英
仏の米国を拂はぬと行くことゝなつたら、英仏が金が出
来るへかくと言ふことである。此案を一の使宜とする方法が
ある。その方法の一つハ大西洋からカリビヤン海及び
中央アメリカに拂はせ、パナマにもう間の英仏両国の
属領なる鳴嶼、及び大陸の領土の一切も挙げて之

を英仏戦争の内部金として、且つ平和の保障として米国を遠ざけることゝなるべし。また先づ英領ベルムダ島（大西洋中にあつて気候温暖、ニユーヨークから汽船で僅ら四時間）を売却せんかと、このベルムダ島は米国を脅威する英国の海軍上重要な根據地である）を始めとし、メキシコ湾地帯をはじめ、ジマイカ、アンギラ、バルブダ、アンチグワ、ドミニカ、バルバドス、及び英米戦争ナマル場合に英領ホンジユラス及び英米戦争の場合に米国を攻撃する重要策源地たるトリニダッド等がある。合せて四万方里人口二百三十万、仏領ハナポレオン一世の

皇帝ジヨセフ、ナポレオンの生れたマルチニック及びグワダルペ等その他の群島、ならびに北米国のお領しなさのと云ふのである。（この一節堀口の外交と文藝中に収録す）

○元も堀口の随筆にある一節に政治大学後の巴里講和会議の当時、仏国政界の一部に、フランスは、アルサス、ローレーヌ二州のほか、ライン左岸の地もドイツから奪取すべきである、と云ふ議論が盛んに行はれた頃の話である。ブリアンと英国全権ロイド、ジヨージとが一緒に講和会議の道すがら、プラス、ド、ラ、コンコルドの廣場の前を通りさ）きた。誰のものともなく言ひ出すこと

喪服の黒い喪服を被せられて居る。この銅像は一八七〇年の普佛戦争の時、フランスが大敗した結果、ドイツに奪取せられたアルサス州を象徴したものである。言へばドイツの勝利を象徴したものである。

ストラスブールを形体化したものである。

フランス人の「無言の抵抗」を象徴したものである。

プリアンとは何か話しかけようとしてゐる。此の銅像を見つめて、フランスが最

コンコルドは、一寸ブリアンの顔を見つめて、フランスが最

しく多く過大な要求をしたドイツの鉄血を奪ひ取

ろうかすると、彼の光輝べルリンの一番眠かる時に

に、フランスは奪ひ取られドイツの州郡を象徴した

こんと同じやうな表情と著に紀念像が建てら

ることとなりますぞ」といつた。

以語調で

決して笑ひを帯び眼こは及びもせん、フランスから取

られた所謂の紀念碑と建てる前に、ドイツ人は定

で美しく掩ひ上げられて仕まつた、廣大なドイツ

の植民地の遺恨紀念像を建てるにせよ、

とやつたのだ、ロイド、ジョージもまた

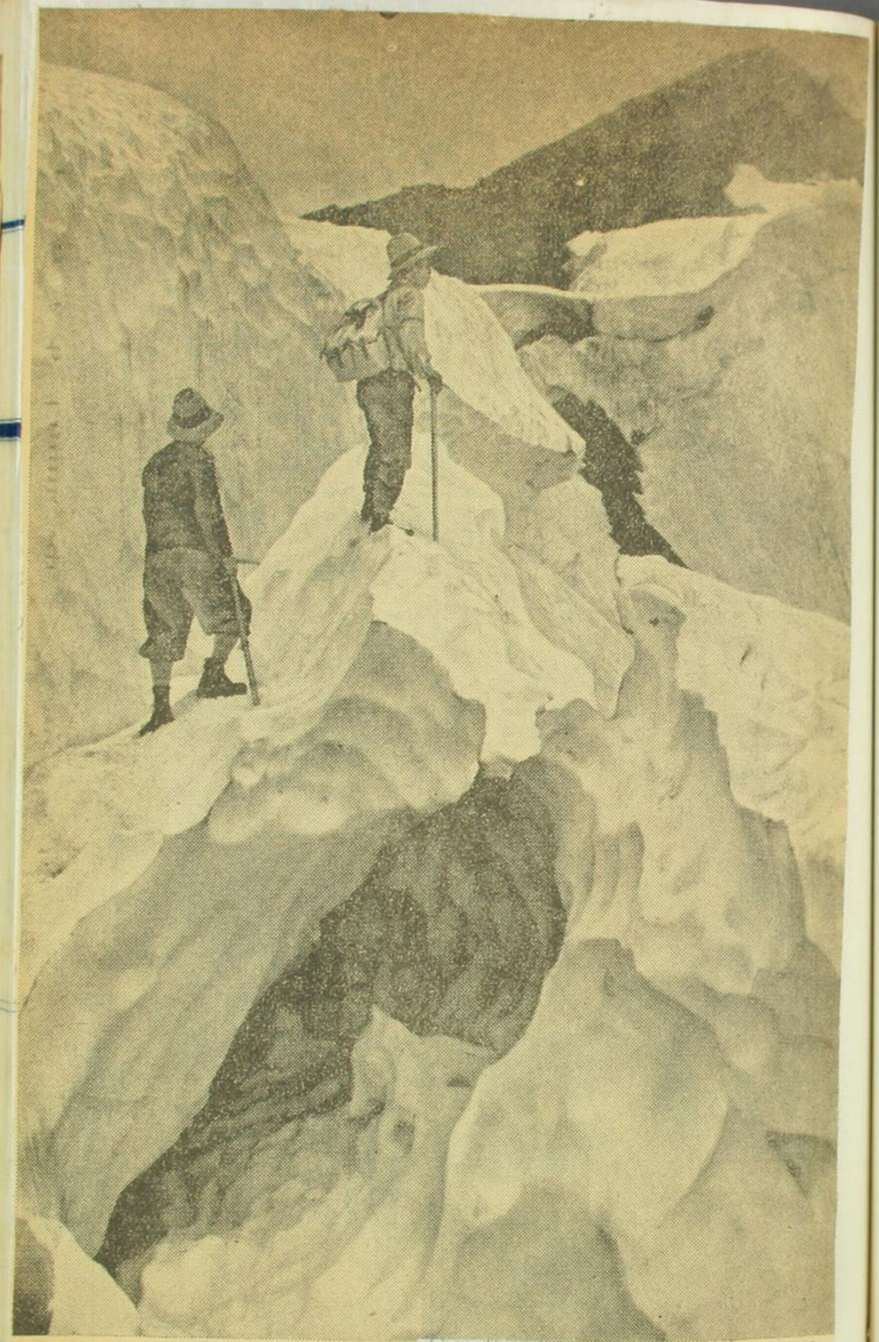
とこの、こんなの高巻の全く第四巻を後にやう

である。

の時の心持がいろ〳〵解されておもしろいものである。

廣侍に有名な章句の除物の西洞の七言絶句の

起句に「物情悠悠章句間」生とあるを宗めと解



⑮『白衣の巨人』（奥穂高）

じ俳句の上有黄鶴高楼吟を有婦夫の婦ひと
離し、特句の春衣帯石晩来意を産婦と
離し、法句の野渡無人舟自横を寡婦と離
し先から此の一首をもの一生を深しひとりぬく
離するの奉仕今じハあるが、そう思くべそ
うも思いまし。不がおうしい。
○漢詩と日本の和歌俳句が偶然意を同わしれるあるも又
るも多いが、殊に漢詩を和句や歌を深しれるがあり
て巧拙の点ひあるが往々深が原化に優りて伝るの
もあるは俳句の隠美に可き深山載せてある内三四
を摘録すると久保雲楊が大石良雄の俳句を集
を深しれ俳歌に

藤原時平の讒言、俄に狂ひ出でて、春氣
うんぬん死なーやんしたら、忠か不忠か分かり
やせぬぞいな

八重白の菊公恐懼流涙日、玉蕊茶碗下士時俗
後当時月便天、一生忠偽有誰知　と回長ひあり
よく〳〵譯しなければ

柳里恭の
ちまたの柳糸ばやうに春風が吹くわ
いな私が心のやるせなさ、思ふ存分に乱れ
い
い

郭振の陌頭折柳枝已被春風吹喜心折別後
征人何得知

橋原蔵

洛人蕉杏の句
五月雨や或庵ひそうに松の月
洛人経剣閣に之んを守りし長夏草堂家遠宵
聽雨哉、何時懸の月、杉影茂庭前、漢詩よ
りも俳句勝れて金蕉の深きを考へ
蕉則陽り詩は無数遺稿不肖、人参却有
稿数年、こんの赤凡の景で、回長の作い歌も
俳句なる里村昌琢の句に
舟よりハ松ぶ川きりの岩うふ
又行家朝臣の歌に
河霧のたちこめつゝ高瀬舟あけ行くさとの
言の葉ぞなる

ちなび漢語に比して趣きハ
倣人昌程の
しら露の江に横たはる柳かな
蛇の目岩ー白露横江、所光橋天の東渡南屋土の文に倣
つとと云ハば句ハ上乗也柳の一字殊にめを覚ム
庚の楊巨源小操の節を詠じて詩ハ
所を楊柳緑烟糸、主馬炊煙折一枝、唯有春風
最相惜、慇懃更向手中吹
室九鳥の巣の之んを四歌に詠じてあるる
うんを吹く名残や惜きち柳の手折し枝を
ーいなの春風
文淳卯の夏帰りの船に原侍を座倒してあるる

蕉翁和尚の
人毎に一つの癖のあるごとく我らの詩や歌俳の
道
の歌の歌と漢語を倣つれとも思ハるこうつれが白梁
天子日高の左の詩の高くあるとも
人各有二癖我癖有二章句一、萬緣皆已消、唯有
物未去、每逢美風景、忘寒吟一篇
芭蕉の句に
馬に寝て残夢月遠し茶の煙
とあるハ仕詩に
垂鞭信馬行、数里未鶏鳴、林下帯残夢、
葉尾時忽驚、霜凝孤戸迥、月曉遠山横、倩

僕休暇除、何時世話

杜詩を読むと苦茶の匂い面白くなる（赤い実）きと名物

○北国は候に日に冷気秋のごとくである、毎年（庭）

温泉行をするに組合に船利を得ぬやうに思ふも不

順に飽き身体をくるくるまわすと書飯と酒を

呼ぶやうな仕末、おくかるる寄物を使すると一皆を

ハ此年の秋伊賀の月秀歌俗と裏目の四十八歌と

並べ比記を書いて本此と校合せ、こう行くべき書い

て見せたのと思つてゐるのとの比べ最後と人と一枚を勧めて

よい気になるいうやの最中に夏のやうなを

別巻と歌俳句をあつめて蜀山の狂歌を

「定家卿、歌人、伊勢物語」

自の「北ぶ」とあるが八月の末年日に初めて器を塔

へ比此自分の北日を博すれと一夏けるい年齢

でないことを云ふ自ちん（俳）俳諧の泡菓と所

をうつう読ちと、杜甫の花徑不曾緑客掃筆

の八句の為君の母の詩を工口ちうを解し文が

変る是が女子人のめの所婚と利鎖し好を拓を

やつれと云ふことが書いもあるが助名衛めの解ハ

海石に工口ちりルと一笑した。

○貝の殻を年蟹の泡が西洋文意の氣すくれの是

話を寄のセ集めることを是ことがあるが女侍

注書よりちくら増補しいやうな天命ると好しん

おく説と此の話好ちの追的好しとあるが

かたまり二三を拾ひ
ウオルテールが其の著の家屋禁止されて、そ
が焼く事ならざることを聞きて之を法廷に及ぶと
を聞きて之を法廷に及ぶと
主人に曰く「いつもの皮肉の微笑さへ浮べて
「いやそれはむつて来いと、俺の本は、栗と同じやうに
焼けば焼く程ますます美味くなるのだと言ふた」
フランスの有名な作家ユゴーはブリアンの著を或る
会にて文法の犯かを指摘された時の彼の
言葉が気の抜けた「土手を突き潰さるいやのろ
の河がナンデ大河といはれるかしら」
ヴォルテールが臭のでは大の的の宣伝をしたちびは
の感をうたが、アンリー、バイヤの書いたる
その作「ロワ、サミュエル」の前に、彼は自身で一部次
：実切れと言ふ、ノートルダム、パリの二版の出版
は特別の時代と言ふ東洋が三ヶ月目と言ふ版
を重ねたと言ふのも真実を喝破したアントワーヌ、
アルバンは言ふ。
トルストイがあるとき有名の新聞を「宗教は
のがいつまでも載せられいので一年間に俗語と
及ぶと、編輯者は初めて知るとき、虚無の宗教
の中にあるのが多くて、それはトルストイ
の著作が無つたので、多分トに模倣の宗教
あらうと書き記さんとあつた、編輯者は

鷄足寺銅印　（平安後期）

（本文參照）

書ちまき　俗こゝ者者ゝ掲げたとこ、

鎧　阿弥寺納札

御物　法隆寺伝来

雷神文鏡

○此八月三日稲田稼翁今日人来の節こ金し次郎の出
版物を見せ之の後例の如く維新の時を移し、時々
話さる盛さ無き人なり、此の余京師名物の獅子大漉俗
一帖を携へ鳥記一巻を贈くわき出序者の筆に代し
且つ後の鳥記の蜀山記文の真蹟と三村に贈さ三村
能く一と真跡とすべし、於田一冊の写本を出し示す、且云
く往年陸奥名尾と称し後の鳥記一巻を見たることあ
り、此写本は其の巻子を写したるなり、取りて見るに
蜀山の書し給ふ記に同一なるも、余の巻末の巻跋文
一の異あり、跋飲の図あるもの此こ図を収めたるが
此写本なり、吉原遊飲の記なり、蜀山の序文
時佛寛斎の跋あり、後の抱一巻にあり、

藤原製

と合候不外部の図あり、入口に不許悪客玉部入義
門と抱一書の書を掲く。高余の崑崙と文一の言き
る図を連絡し抱一文晁蜀山時斎寛斎天民の
観覧席、柳橋の妓が侍しれる図があり
また次に合坐の其の不外部の図があり波鯨
持込むこと其の美を洗濯することの大鯨を断つ事があ
り、次次の茶屋巡り酒大樽を担ぎ亜欧、奈良口とも
酒を出し其を樽と云ふけも量ぶことあり、備せて五藤
のうめと酒と絵一そう図あり、日本屋敷の南の用ひた
る杯の図にあるの食いそ其の図を描かこれ客させ余
が芸図を御迎えと偽り意けて描くべし、日慨ちくば
極めて愚者なりと文七図も第七と表こる甚し、西も

八行んと有りや為国し知らずと云くり、此扇子の志紙奏聞
ニ　天保十壬寅歳十月廿六日　一名鞍馬島記と称す
高陽河鶏　水戸徳仙　越智直澄撰
幹之　一名鞍馬島記一文記南敵千万等

とあり　而して文庫所収文庫の花記文
あ田をらしたるを迎印を蒐集し世を知られたるあり
早乙丙の所記印皆あ田と帰す、その又三村作清の
花記印百数あ田と帰す、総数四百数を以て云
ふ未だ多く集めざるもの多し皆精選の印
也
余偶と書法を今拙法を国者の集数に関し一篇を著
すんとす、序文を別紙大阪京都の国者の
集家に推の為めに、石刻の拳る所学つて大阪

の京都にて田村太兵衛、宝和助、新紙行三郎（宝
屋）の時亭と称す）亦田所三郎（吉野）才を拳
く、京都にて高井播磨（ちうつや　橋仙　高井宗家）
と称す）杉浦三郎兵衛、田中勘兵衛、神の秀実氏
内藤湖南、高木利太、等を拳く、なほ人多しなり
ある国者の集数の多寡を知る法を不一二三
止まらず、余の提議に秋冷を待ち座談会を催さん
こと提議（衆之んも可とす）
三村作清の竹を野長瀬氏をもつて作の
毒を駆すること特効あり指ちど傷ける時作紙を
ツ巻くうて貼んの木ーターをもつて敷ちく作の肌に生ずる

物七寸の効ある竹酒と云ふ、世の病中に生ずる病は葉剤
ゝゝ年暮の家ゝを丁寧に拭い、音信決して棄ず、世
の使ひ物を包むに便利なるもの、生ものゝ腐敗を防ぐの函あるべし、説く、経宇、釣宇
矢等皆竹なれども、皆さん〳〵まつ葉あると称つた。
今の竹会者は柳会者い西洋のカバンに優して美の西洋
を淡き、エラステックであり、どこの有野なるも、其つ優を廉
であるを黙と称せ世界と(カバンヒーロー)(冠)なるを語る。
人生の苦と苦の苦の苦の働て苦みを吹くことが真の苦を
歴しても追て苦の苦が苦悩しるのを、比叡山の
ゝゝでい、苦を苦ことを故障を寺から中止
しなと石刻碑を、元旦ゝうジオで放送する警察の

或の苦の苦かも知れぬと疑を自ら思はる
安田い北海道が意衛館と載せ紅葉山人を一読
なと陳ゝ山人が略伝
人鏡花の作の義血侠血と如葉ゝと載せ
ことゝ云ひ及び自分(安田)は其の原稿を所持
して居ることゝ出し一示さんとの事、之流の
芸術を世しての私らに深くも知つて世ゝる新原
のゝゝが、ゝを展べて見ると巻首の表紙裏
に鏡花の筆で先生のお蔵で自心が記ゝ
載せんとも嬉しいと云ふことが書かんとあるゝ、七七
中を見ると、鏡花自筆の原稿八僅ゝ二枚
みどあるゝみて、あとは全新山人の筆で清書

の五十分間の[illegible]多くハ今江戸の例の流儀でも
一度ハ見れば、一度ハ見すまじき事
方が早いと考く執業しれまらしい僅この人の
りかぬ業して測量ハセもしまると考くなる大間違
あることを覚えし人今夏[illegible]山人が著述を
苟もしるべきことを知らず

八月四日記

○帝山[illegible]出版の大定版の三冊目が出版さんとする
千頁近くある巨冊なれば[illegible]を[illegible]
[illegible]大業で、[illegible]の印刷今[illegible]
刷を終[illegible]著者失敗[illegible]
[illegible]一枚附いてある数伏
をおろれこれを記念[illegible]

○四月登山[illegible]
と涙み思を[illegible]
数位の[illegible]
巌壮の不流[illegible]
[illegible]と言ふ[illegible]
左側と一[illegible]
り、[illegible]
以て案[illegible]
[illegible]

[illegible]

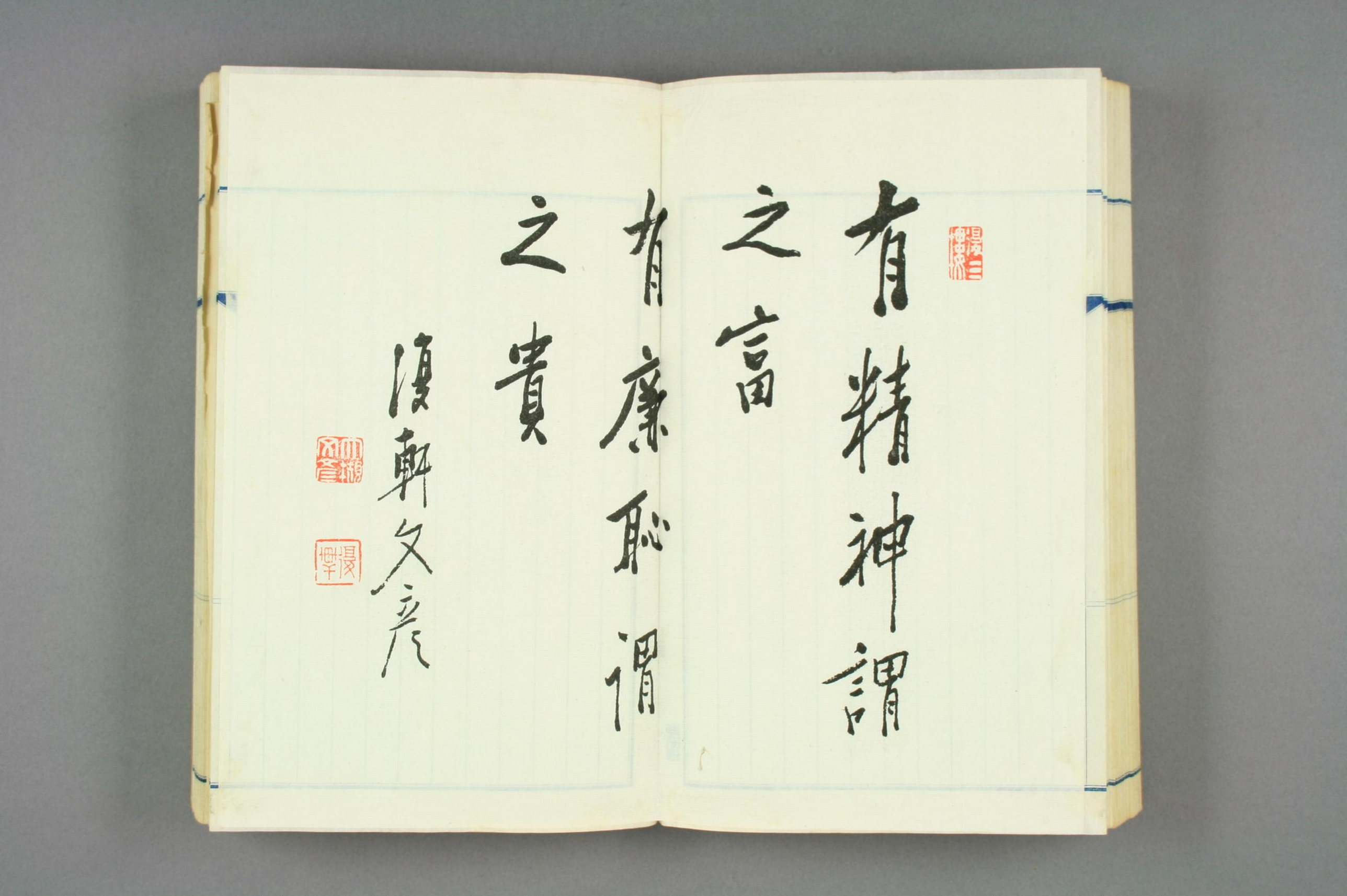
[illegible]

[illegible]

下五嘉[illegible]

下西新石の欲[illegible]

八月五日記



有精神謂
之富
有廉恥謂
之貴

復軒文彥

○西洋の玩具らしいもので小児が立つて小便をしてゐる像が
ある、別に気も留めないでゐたが、昨日銅版の此像を
獲れ其也に一八八一の刻がある洋紙と相違ない
此像に就て人の話を聞けば、那破翁が威權赫々たる
る時代、ある時の凱旋に巴里は熱狂して歓呼して
那翁を迎へてゐた、其人ごみの中で平然小便をして
ゐる小児があるので、衆目を惹き、いろいろ噂が立つて
終に此像が作られるやうになつたと云はれてゐるが、此児
の沈勇或は那翁を超過(凌駕)するの賢あるとも云ふべき
歟、暇あらば小品架中にも入れ一笑の資に供す、
○物徂徠が孔子の像を作り東夷物徂徠と落
款をしたところのが祟つて徂徠は半唐漢と疑

はれてゐたり、是れが爲め山縣周南らの贈位の沙
汰があつたのに徂徠ばかりはなかつた。これに就て
犬養木堂は田中内閣の時今上御即位の大典
に贈位あらんしと運動した書簡の写が木堂翁
誌に収めてある。即ち其切抜へ巻頭に貼りこん
で置いたが、犬養公の評する所と機んで東夷云々
と書いたと誂へたのは平田流で是れは真赤なうそ
で、大日本夷人物茂卿と書いて、敬意とあるのが其
尚が、夷人と云ふ布衣平人と云ふ意であるから決
して支那に媚びたのでないと其の冤を雪てゐるが、木
堂の手紙にもある通り徂徠派の学統と儒者さへが
徂徠の学力に服してゐることの事実が、斯る進言

はるべき芸術

○毎年七八月は家庭をして随筆を書くことが例で秋
になると一冊の随筆集を出版することが数年続いたが
今年は種々の雑誌から寄稿を托され、また自分で
毎日一篇つゝ書いて居る仕末で随筆を纏める暇
特に随筆に取掛る暇がない。唯此頃
の雑誌や新聞に書いたものと後の纏めた随筆の
材料が自然得られる譯であるが、雑誌の寄稿
や雑誌の質と違ひ、随筆と云へばその
ら、一冊の随筆に入れて料として不合格のものもある、
保し需めらるゝ場合に張り合がないよりも
言へば二日に一篇と定めたらこゝろが楽で忙しい、また

為めの為に朝から晩まで書きたい執筆に没頭する
ら、先月から今日まで書いた随筆の目を次に掲げると
左の如くである

山水美の観賞
伊賀山水漫記
塩礼讃
裸体漫談
書と手紙
お宮の思ひ出
あるある山人
池袋
大隈侯の大名旅行談
松時の四国生活
嬉遊笑覧と天保漫談
東京湾の魚
夢の清酒
粉茶庵前
絵手紙
往年の元勲の墨跡
不忍池畔を徘徊して
書画漫談

平稲田岩の国漫歩　四回
小特産品陳列　四回
通人馬十車
愛樹感
眼
債低金　奥日記を読む
兒玉と数多小高道水
北海道移民一万八千弱　発表
岩道水の産業
和田垣吐雲
馬鹿一百人を読む

○支那の雲南に産する大理石は、いろ〳〵の珍がある、中に雲景を描いたやうなものもある。巧みな其の珍あり山水を描いたやうなものもある。巧みな其の珍うあらはれるやうな落くはじ、必ずしもあるけれど浦度の材料　ようやうもあるのを、雲南行の人ハ土産に持ち来る身分も最近二三枚買つたことがある、完から人工的であるかと思ひ、程おもしろく珍がなしいんでゐるが人工的なものらしい。自分はこんな親日きまぐれ解を得たいが地区化物の古谷産の山水形の盆石を得たのでいろ〳〵考へてゐるが、こんなを眺ろげろうと思ひの解がある。造化が侵蝕作用で山水渓谷を心ゐとまんべん盆石と

同じ作用で出来るのも不思議いろい、唯だ大小の相違
あるのみ過ぎない。元来山水美とふも人間の嗜
好次第で、峯の高く聳え立つ山の形容、或は坂
や渓や瀑に似る白線のある、のも山水美とする
のであつて、造化は何も美観を心にうえつけて居る訳
でもなく、唯だ石質が侵蝕の為め、或る不の部
分を或る形に残し、自然に山水の状を為すに過ぎな
いのであらう。大なる山水も小なる盆
山水も其本質は同じ理を具へ、同一と考へ
さるを得ない。長谷石の山水形容のものが露出
してゐるものでも、一塊の石を割いや
う山水の状のものが生ずるのだとふのは一

藤原製

見侵蝕作用で出来たものが土砂の堆積
長い間年月を経て石化したものと解すべきで
あらう、ふる国石を砕いて珠玉を得ることもある
から、同じことを見ない訳にはいつくのだ。斯く考へて
ゐると、愛石家が好む盤石や、文房
具とする石を珍重するのも、成ほど人工を加へた
かに思はれるけれども、それ程でもあるのも強ち怪しむに足らぬ
所がある。合つて自然一種の形を成し、他と
石質を異にする物を拾ひ集めて、其人間
の好む様に仕上げたものが拾ひ上げられて珍重されるのも
こんな造化の為さしめたものと云へば、実に造化は無尽蔵
で豊富である。愛石家の珍重するのも動もすれば

心境
八月號

水禍の思ひ出

市島春城

「越山長青水長白、越人長家山水國」の詩は、宋の詩人宰相王荆公の作だが、宛から私の郷國越後を詠じたかの如き觀がある。兎角山水美の國土には水禍は有り勝ちである。一朝水魔があばれ出すと、人畜家屋田圃が犧牲になり、其損害は莫大であるが、これは水神に納める租税の如きものである。今度の水害は北陸一圓に及び、吾郷國も亦免れ得なかつた。越後には信濃、阿賀、加治等の大川が勢多くあつて、實は水魔の叢窟である。明治以來治水の績が大いに擧がり、水禍は著しく減じたが、尙ほ夏期大水が到ると、堤防橋梁等の壞裂を免かれない。私は郷國の水害を幾たびも目睹してゐるが、其慘憺の狀は火災よりも甚しいものがある。其害の急速に且つ廣汎に及ぶことゝ、農產を腐爛し土砂で水田を埋沒することに於て。

私の遭遇した大水禍は、戊辰の歳の夏月、信川の暴漫した時にある。自分は其頃六七歳の小兒で、兵亂を避けて西蒲原郡に於ける所有地の田家にしばらくゐたことがある。此田家は仰ぎ見る程の高い堤防の下に在つたが、その堤防の幅は仂車が二輛優に並んで通過し得る程で、堅固に築ひたものであるが、一朝大水が到ると、汎濫して水は堤防を越へ、土が緩む結果遂に壞裂を生ずるのが定例で、其の間數は二十間乃至五十間にも及び、堤下は忽ち泥海となる。吾等は即ち此の災厄に出遇つたのである。斯る水禍は往々あることだから、避難の用にと、平素小舟が家の軒に吊してある。一夜深更水が門まで押寄せて來たので、家僕は大喝一聲、蚊帳を取拂つて吾等を呼び起し、寢卷の儘室内から舟に移され、濁流に投じたが、夜は暗く雨も降りつゝあつたので、小供心には何が何だか一向に分らず、暫らく漂泊した後、半ば水に沒した大樹に船が繫かれてゐたのを翌朝に到り初めて知つたが一夜どうして明かしたか、敢て畏怖するでもなく、夢中に過ごした。天明に及び驚いたのは瀰漫の水が湖海のごとく渺茫としてゐて、堤防は早く冠水して見當らず、滿目濁流の滔々たる外、何物も目に入らなかつた。追々上流から、橋梁の斷片や家具などが流れてく

る中に、小供心にも驚かれたのは、大きな茅屋が二軒も三軒も押し流されて目前を過ることであつた。鶏が屋上に立つて悲鳴をあげてゐる光景は吾等をして悽慘の感に堪へざらしめた。殊に船中の一同を脈がらしたのは、船を繋いだ樹上に五七の蛇が攀ぢ上つてゐて、それが船中に落來る無氣味さは女連を戦慄せしめた。吾等は如何にして安然地帶に達したか、今は記憶に無いが、半日食も取らずに舟中に在つて減水を待つたことゝ思はれる。もと兵亂の慘禍を避けん爲め此處に移つたのが、案に相違して此の恐るべき水禍を體驗することになつた。當時の童心には寧ろ陽氣の銃聲を聞く方が興味があつたゞらうなど、後日述懐したやうな仕末で、實に慘憺たる大水害であつた。

郷國の諸川が戊辰以後も幾回か氾濫し、水禍を繰り返したが、自分は東京に住してゐるので、其のすべてを目睹しては居らぬ。唯だ一二を云へば、いつぞや長岡で講演會を開いた折、信水が氾濫して市中の道路が股に達するまで浸水し、講演の會場に集まるものは皆舟に乘つたやうな仕末であつた。又ある時の大出水には自分は偶々衆議院に議席を有してゐたので、職務上新潟附近の罹災區域を船に乘つて視察したことがあつた。此の區域は信濃川に沿うてゐる所で、平素は水の多きに困む水腐地が多く、我田引水の爲めよりも我田排水で喧嘩の絶へ間のない處へ、信水の暴漫は不公平なく、田も畑も用水路も皆水底のものとした。吾等は滿目渺茫たる濁流に掉して半日視察を遂げたが、奈落の底は概ね水田であるから、濁水は肥料と和して悪臭鼻を撲ち、水底には頗る凹凸があつて、用水路の柳などが暗礁となつてゐるので、動もすれば船はそれに觸れて覆らんとしたことが幾回もあつた。いくら熟練の篙師でも田畑に舟を遣ることには經驗がないから、吾等は危險を感じて手に汗を握つた。その際吾等は同船の人に「大海に溺死するなら格別の事、こんな糞水の中に萬一船が覆へるやうなことがあつては一生の名折れだ」と言ふたが、あの時のやうに不快且つ危險を感じたことは無つた。

信川の剩水を排出する大河津の分水工事は吾郷土に福祉を齎す大事業で、幼時水禍に遭遇した自分としては、此工事が完成してまだ水を通ずるに至らなかつた時、逸早く縣の技師に伴はれて態々視察に出かけ、現狀を見て歡喜を禁じ得なかつた。此分水は長い歴史のある難工事で、地すべ

りの爲めに幕府時代には終に成功せず、一揆などが起つた難所であつた。加治川の瀬替工事も亦治水事業であるが、これも長い歴史があつて自分の郷里に關するだけに、往年微力を致したことがある。併し此の事業完成の蹟を見たのは近かく二三年前で、今は七里の堤上の櫻樹は他縣に比類のない名勝となつてゐるのに、機會がなく訪ふこともなかつたが、始めて其境を踏査した時は紅雲搖曳の美觀を喜ぶ外に、事業上の喜びがあつた。郷國の水害が昔しのごとく甚しくないのは、此等治水の庇蔭であることは申す迄もない。全體日本の如く雨量の多い國土のハイドロリックは外國のそれの反譯では役に立たぬ、日本の治水には日本特有の工風があらねばならぬと毎々思ふたことであつた。長い間日本の治水術も幼稚であつた上に、國庫が豐かでなく、全國の各大川が氾濫すると、各川に姑息の復興修理を施して總花的に治水費を振割つた、其の總額は莫大のものであるが、各川に割當てゝ見ると、何れも根本的に永久の治水が策せられず、或る季節に大水が到ると幾十幾百圓投じた土功が一掃されて、大損害を幾回か繰返した。吾等は何故總花的に國帑を水に葬るの愚を爲すのだ、何故公債を募つてでも、根本的の治水を策さないのだと叫んだこともあつたが、今北陸の水害を聽くにつけ尙ほ此感無きにあらずである。

西片町

梧桐夏雄

西片町は東京帝國大學の附近にあり、大學教授連が多く住んで居たので昔は學者街として知られて居た。博士とか大學教授とか云ふ肩書が宛も、一代の碩學の如く思はれて多大の尊敬を拂はれて居た頃、西片町を包む一帶の空氣は何か特別優良のものゝやうに思はれたが、今は全くその特色を失ひ、博士の家も寥々たるものとなつたが、閑靜な地區として環境の甚だ佳良なる屋敷町であることは、今も昔に變らない。

西片町と云ふと直ちに阿部邸前面の廣場にある大椎樹が思出されること、宛も羅馬と云へば其處の廣場の大噴泉が思ひ浮べられるに等しい。樹齢何百年を算し今日東京に現

越京旅記　旅の当時の日録
下田海記
久里濱紀行
長瀞紀行
修善院和歌記
椿島と寒月
帯と裡
酒呑六十刻
佐久良の和歌
雲坪とフルベッキ
観濤国語と漢も
後水鳥記

横原制

拔刀隊の軍歌
一宵清遊簿
食道楽座談
難難坐談
酒と硯　エゴーの道子　産兒の判決
和歌集芸閣の雲山子の序　似木
乳房　寶冊の印（不得已）　横濱の大洋館
非人と死　華山と馬琴　朝鮮の物語
盆石　大和田の国府　白雨家とエリニー
ビスマーク、ヘリング　とトットラーヘリング
支那の大り　唐山見書の和国　小侯
鍾定斬り　吉利貸の元祖　雲代の紅術

天神天の時規い偽意を所以、

偽書説

○近代の注家の宋刊本と自由に親しむことが不幸にして取つた仕合いであるが、宋本は減多に市場に現はれることはないから、古本屋も高値で売りたがらない、宋刊本ばかりを集めて研究する人でもあれば、宋版と見て疑はれるものが多いやうなもの、覆刻本も原刊を乱さやうなものがあるから油断ならぬ。宋刊本ばかりを種々の特徴があり、とくに宋刊本を家に集めて見ると、特徴だけとして挙げることが、とうてい不可能である。例へば宋刊本の匡郭の單邊で双線がないものとか、なんでも決してそうでもない。紙の質もさまざまあつて北宋版の本でも善紙といい甚だ質を異にし色が白く厚みもあり引き強く、日本紙と見違へるやうなものがある。先年東寺に北朝の開版を見て立山版であらうかと疑つたこともあつた。但し宋版の紙質は決して斯う紙に限つて居らぬ。或の板心の白口なるを宋刊の特徴だと善否信ぜられたが、黒口のものあるからこれも特徴とは言へぬ。善否を問はず宋の日天子の諱を避けて闕筆してあるのは宋刻としてある。のは鏡宝の一法と相違ないが、唐版のことき字が本位となつてゐる書物にも闕筆がかうは陰の字もある。勿論宋本を補刻がある場合は、其の部分が字体や刻法が異なり且つ方つて補刻のものいうまでもなく、宋刊でないこと疑いもない。其の鏡別の版るものがあつこうい。但し宋

刊本ニモ日置くとハ云くめれども、刻工の名が紙隅にあるこんるの何人も早く氣がはいてゐるのだが、それを鑑定の樂しみとすることまだ好書家の氣づかぬ所である。刻工名は種々の名があつて、それを集め組んで見ると、ある時代ある地方の刊行であることがおよそてゐるといふのも、一つの或る宋本が南北何のもとこふことが既にあるものである。或い杭州臨安の何と鑑せられたものである本の題記、それこそ刻工の名と吻合するものがありとすれば、それに依つて凡その鑑定が出来る譯である。近代考証の方法が北禅寺を始めとして今日の考証法の基礎が北禅寺を始めとして今日の考証法の基礎を作つたが、其の委曲は書法学会雑誌から切り抜

橋原製

此冊尾に収めてある。

○一銭銅貨を型のまゝ機械の孔に挿すると、機械が働き始めて体重を標示する、自動機を可なり大きく行つたものである。北の自動機がいろ〳〵の商品を入場者が入れて出して見せる。デパートなどでは、同じ方法で洗濯する業者を導入して、最下の洗を挿すと、それが出て来て、サーバビスを問答するやうなもの、いろ〳〵の動きをする。北の自動機は二尾を洗濯屋に於ける洗濯機の動きをする。その機械の最上階に電灯の光線を集めたものは、一銭投入すると同じく機械が働くが、鉛を出すとの記してある。一銭を出すと

入ること、一種の切符式のカードが出てゐる。それとともに、表面は其年中に出生の内の男の名が列記してあるし、裏面は其月の生れの人の性格や賢愚や、其人の注意すべきことなどが印刷されてある。一種の滝のやうなものが、こんなものも巧みに立体的に見せたものに過ぎぬ。その小さい神殿の前に、華表があり、華表の境内のやうな出来てゐる所に、華表の下に神宮が一人立つてゐる。亦神宮にも数々入れる通りに狐が二頭並んでゐる。さて、二銭銅貨を投ずるとせと神宮は回転して社前に進んでゐるさき出し、華表のことときうを受取り、それを棒にして、それを棒にして入口にうくまで進んでいくると、二狐を通り神宮に向つて進み、華表を受けて面白が投ずると、亦狐が投ずると亦神宮に向つて入口まで進んでゐると二銭銅貨を投ずると、あ狐の棒にしてゐる華表を廣げて入ると、去る迄のきいてあるのくじが出ることゝなる仕掛で可なり複雑だが、一寸面白さうなるのが可なり其の振りつてゐる、其の機械の冷凍焼やくらの程の小さなものである。

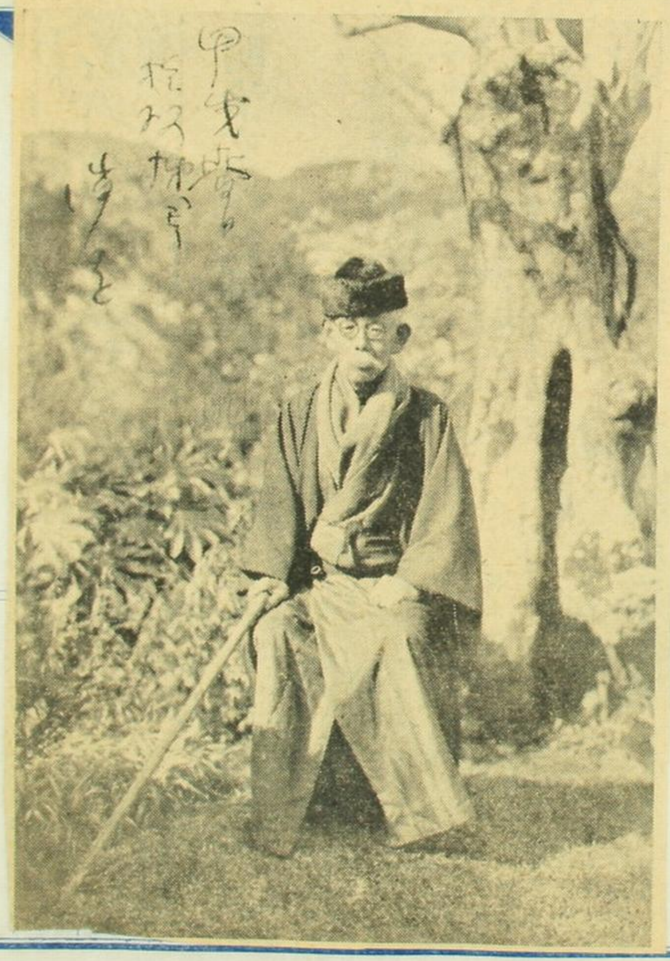
の表後の通路から此めて自動車の後ろ

うきゝ二枚まつこの迄紙二三枚

左と解す

八月十四

なさるるの尚殘んがらも此命生きむも
思く惜しけくもあ
有い言葉中の實感に
吟ずいやいつトの花の歌氣ぶが生いとけ天氣
い魅りの花かしるべくも
異月はかうと変するまや九十年の
昔さ日中も涼しとおもほゆ
昔人の植えかりたるあつきぬも貴のみの
身に涼しあるけり
流を見も
秋立ちぬ此度もと空をい仰ぎらせ



秋風や甘はぬ蜜の蜂の

のこの書は今日偽書に就ての研究を開
始する際は、一冊も参考書を図書館に備へ
出し得ないうちに、幸終つて漸やく早稲田館
蔵の二三の偽書に関する図書を借覧することを得た。

支那の偽書に関しては、姚際恒の著した古今偽書考がある。官板となつてゐる
四庫全書中の偽書は悉く出されてゐるが、早大図書館に遠西行道の輯録した偽書一覧と
云ふものがある。宮本氏の『姚際恒の偽書』と共に四庫全書に保存せる輯録の便利の書也

他に紀藩の保古山本信哉が文化五年に著した偽書説三冊が校刻されてゐる。これは偽書
篇目三十一篇を挙げてゐる。虞書、夏書、周書の内の偽篇の偽を摘発考証
してゐる。

偽書の研究は自分の注意を惹いたのは和書の偽書として考へられる和書の偽書と記して
多くの人の研究者の考証いろいろの書物に散見するが一部に纏つた成書がない。早稲田大学
本で、速水行道の偽著と称する偽書叢書がある。北村の嘉永六年の著作、神書、紀伝、氏族
家書、物語、兵書、教訓、釋書、地理、雑記の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八月十三日

神書

神別本記　四巻

神道五部書　十巻

倭姫命世記　御鎮座次第記　御鎮座伝記

倭記　御鎮座本記　宝基本記

三部神経

天地麗氣記　十八巻

天書記　十巻

神宮実録　一巻

唯一神道名法要集　二巻

麓田問答雑録

一宮記

三社託宣

八幡愚童訓

神代　一巻

六根清浄祓詞

天神受記　一巻

神道十二部書　十二巻

五部書　天口事書　古老口実伝　御奉仕記

御鎮座本紀　桙殿縄式帳　心御柱記

神鳳抄

天書

神名秘書

神宮雜書記

類聚神祇本源 十五卷

雜史

前太平記 四十卷

前太平記 廿一卷

鎌倉実記 十七卷

義經勳功記 廿卷

信長記 十五卷

三河後風土記

雜波戰記 六卷

吳本朝通鑑記 二卷

足利治乱記

淺井日記 二卷

吳本義勇軍記 二卷

多氣宮蜜 二卷

後太平記 四十二卷

南朝太平記 二十卷

楠木拾遺

筑紫卷

吉野卷

記録

扶桑見聞私記七十一巻

蘇九郎盛衰記 五十巻

室町殿日記 十五巻

弘安記

有職

弘安仁式十巻

弘安禮式抄 十二巻

中家寶録 二十巻

大臣抄秘記 二巻

大臣抄書 一巻

十張子の巻

立憲法

南朝公卿補任 四巻

氏族

聖徳太子傳暦 一名平氏太子傳 一巻 二本

字書

類聚名義抄 十一巻

二人九祝抄 一巻

桑氏漢語抄 十巻

篁歌 字畫 一巻

物語

真字伊勢物語 二巻

日本伊勢物語 三巻

伊勢物語髓脳

宇治大納言物語 三巻

四季物語

住吉物語 二巻 三本

源氏雲隠 六巻 附山路露

記

須磨記 一巻

物語日記 一巻

長恨歌記 一巻 二本

歌書

歌仙家集 一名三十六人集 十五巻

人丸集 二巻

伊勢集 一巻

小町集 一巻

業平集 一巻

素性集 一巻

山家集 二巻

白波歌 一巻

二人丸秘物 一巻

和歌四式　四巻
三立記　二巻
器物書　二巻
桐火桶　二巻
古今集序
菅家百首　一巻
末素記　而中吟　一巻
御集抄　三巻
古今集序注
古今三木三鳥　秘伝
住吉口傳
古今集傳授系

十口抄　六巻
新撰髓脳
定家卿百首
十二月花鳥和歌

兵書

訓閲集　十七巻
虎之巻
柳七巻書
軍林寶鑑
思地左近中之書
柳四戒　桜井巻

殘儀無餘
甲陽軍鑑
武門要鑑抄 二十卷
夜合記

一 教訓

和論語 十卷
人鏡論 三卷
世宝家遺誡 二卷

釋書

十王住

迦命地獄住
說法明眼論 一卷
日蓮聖人書 旗漫荼羅記
異國龍口本 祈禱注 卷
法華行住
法華住疏 四卷
維摩經疏 五卷
勝鬘方住疏 一卷
秋草紙 一卷

地理

日本風土記

十訓抄

和漢朗詠集 二巻
古今拾遺 四巻
競馬抄 二巻
閑居友 二巻
長明抄（長明記）一巻

雜

叙巻 三巻
弘仁歴（運記）一巻

橋原蔵

橋原蔵

姓尸抄 一巻

書目約百三十

以上の目録に書目を巻の名、其考証のまゝを略す
早大本に就て見るべし　八月十三の記

案するに一概に偽書と云ふも殆ど人を欺く目的を以つて著したるものゝ、又は
の存したるものを狡猾なる書賈等が言名の名を著者の傳等数へ、偽書のあるものさるものの外偽書
と云ふ一例なり、時代弟の人を目著者とするが如き
内容の時代と合のものと生じ偽造とさるもの、
書名のみ存して其書存せざるものあり後代の出あ
り、例へば日本風土記の内容は出雲と異なる

の風土記のみ、他の各国の風土記のあるは、出雲豊後
の両記に倣ひて、著者が名乗つて天下に公表
といふべきものなれば、其の風土記なりとて、
すべきものである。伝古記義注記雑設問記などの数
は、もとより正倉の唐櫃の中に、しまひこまれ
野史とも云ふべく、軍書の類に、其中の事実と誤り
あるも偽書とまでは、云ふべからざるも、
中、記るの確かなる故を以つて偽書とまでは、云はず
べきあるべき歟、

系図の偽造家としては、なほ波羅
はまりとて、打下童長お経も偽造し、多々良
玄信と系図人も注家の如き、高下も偽造の花押

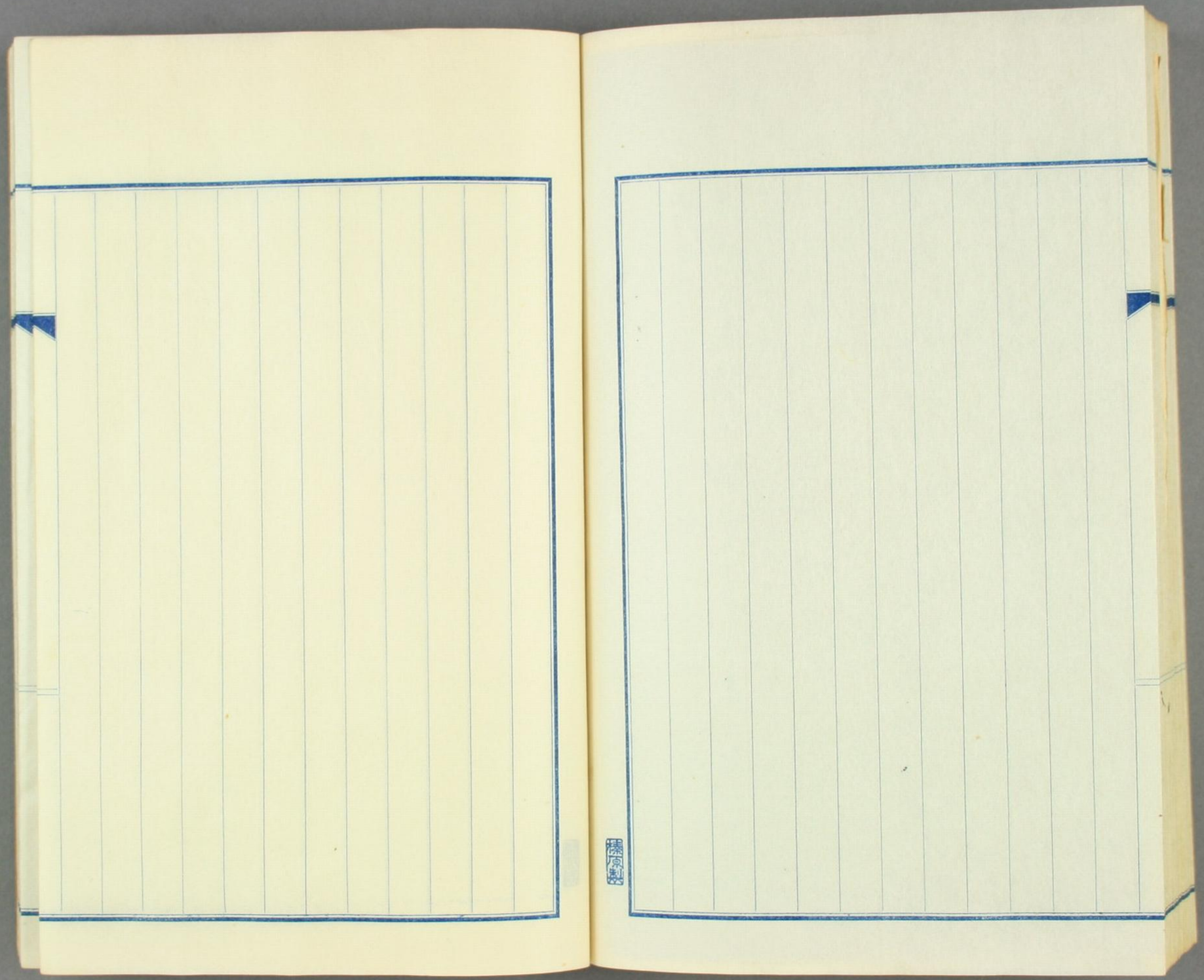
田源氏とふものも偽造あるとしても、
○偽書とは何ぞや、偽書を云ふには、先づ偽書の定義
を一考せざるべからざるが、度義と云へば、記述の誤り
あるものを一切偽書とさんとするものか、笑楽の者
めて心つけ軍記物語などの数の、正しい材料
のみを採つて、長ながしく、こんは偽書なりとなすも
俗書とふ方が、前つてゐる。偽書とは、全偽
造の意図が、必ずしも伴ふ。行う者のなすべき所あつて、
る書物の偽書が多い。仍論じんが主張を貫徹せん
為めの著述、為りまつる者が、あるべき相違なるべかし
んば一概に偽書とは云へぬ。同じく主張と云ふて

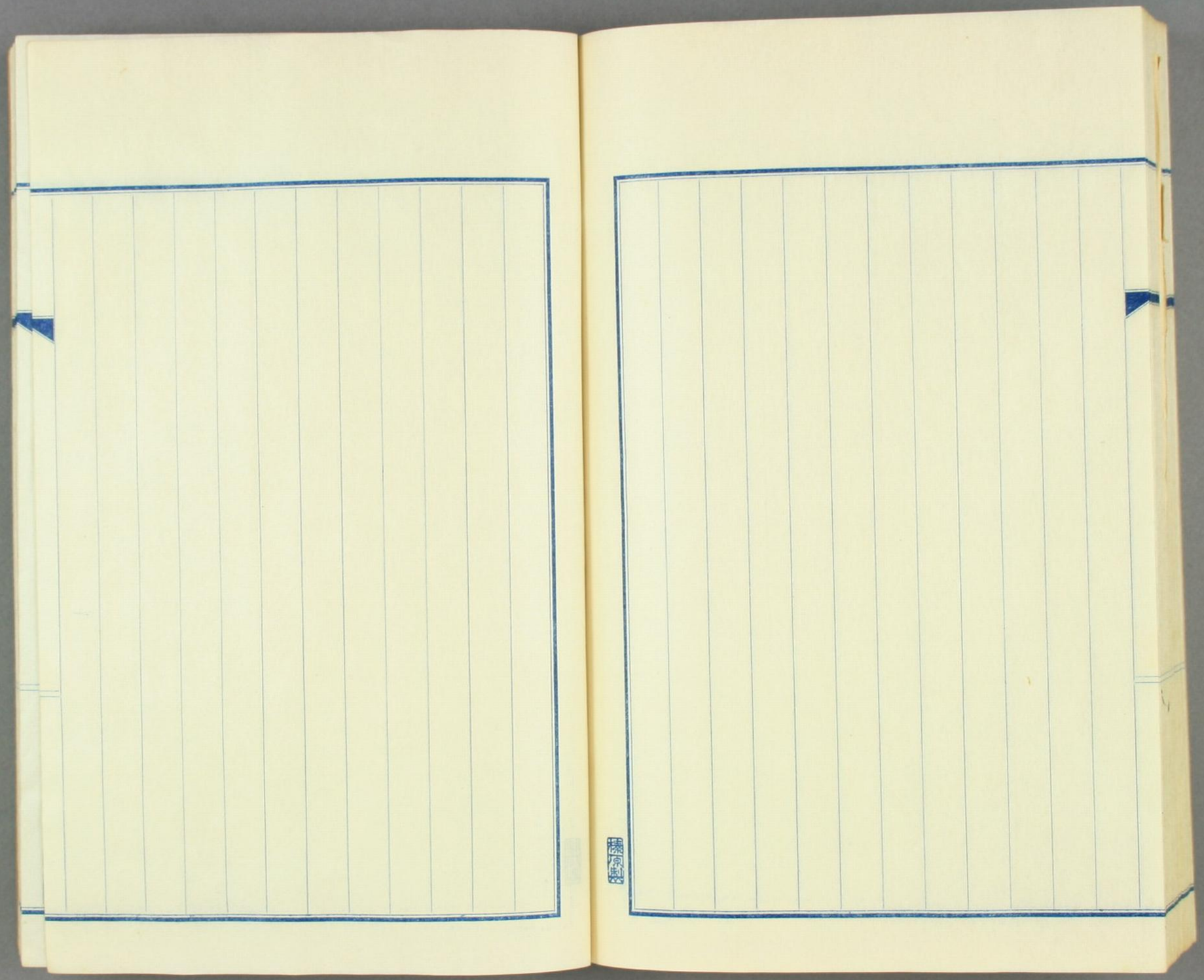
例へば、神佛部曰の説を唱へ、其の書は殺さんとする古典であ
ることを示さんとしては、其書の偽書である。僧潮音が作つ
た大部の舊事大成経の如きはそれだ。人の名を
託するの書物は皆偽書である。其の意図は或は
人に託して其書を重んぜんとするから来してゐる。
楠氏の兵法だの菅家遺誡だの云ふ類は皆後
人の假託であるが楠菅の遺作であるかの如く見せか
けた所に偽がある。日本人は氏族を尊ぶ習俗があつ
て或る時代の立身出世者は系図が必要であつたから系
図の偽作偽書の類は多い。寺社の由緒書も偽もの
が多いのは、寺社の格式と其の歴史が大なる関係が
あるので、都合よく作られたものが矢鱈とある。

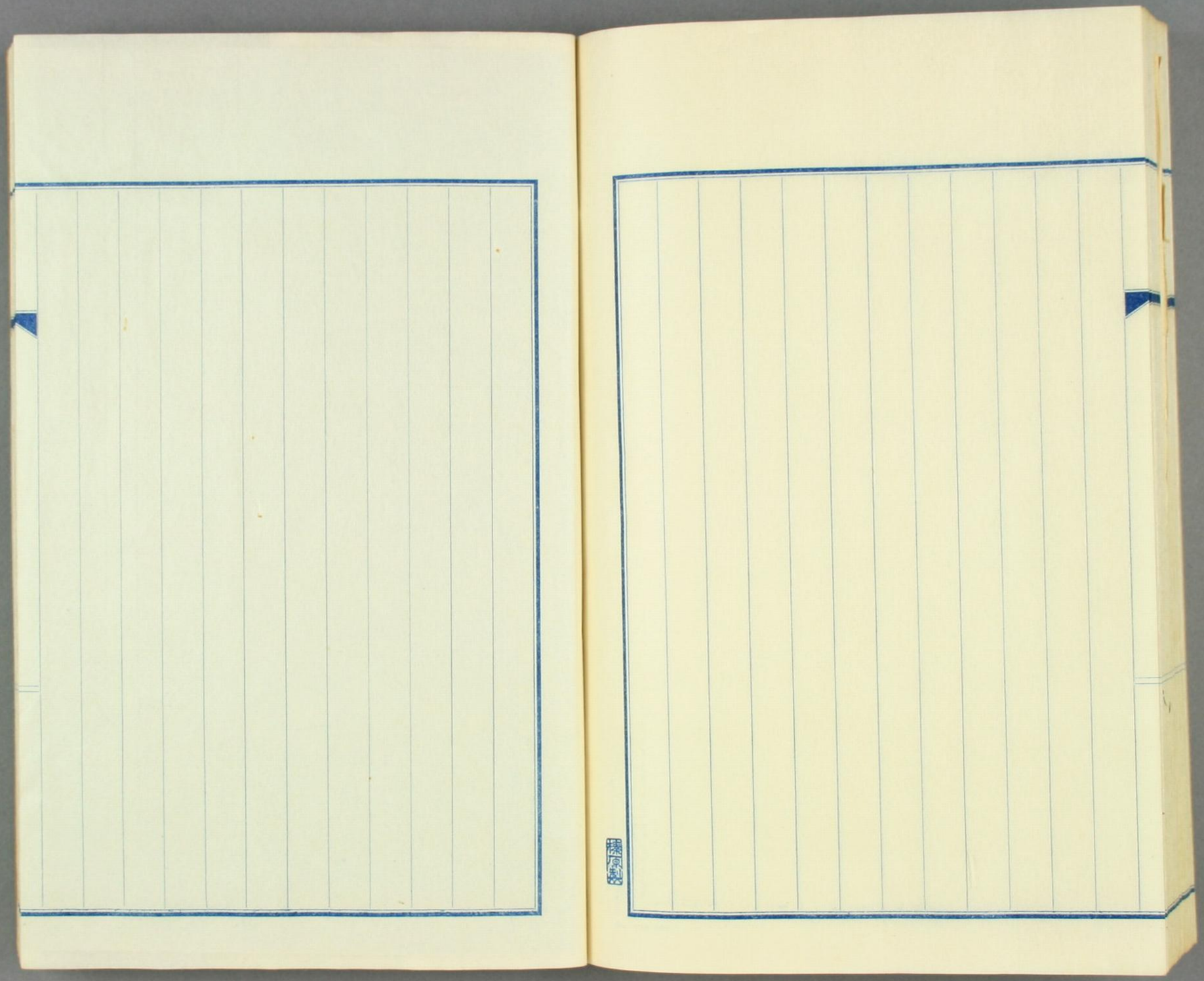
藝の東院講の如きがある。
偽書の内にも種々あつて真書に雑へるに偽を以てす
るものがある。書物は脱落してゐるもの多くは逸して僅の
若干存するものを補ひ作した数の此数がある。日
本風土記の如きは真本は僅に四ヶ国の記のみ存
して居らぬ所を補ふ為めにて後から逸書が現はれ
たがそれは偽作にかける所に偽の面目がある。或は真本の
末尾に他賢の題跋や刊年変化を摸して添
加したのも偽書である。
著者の意図が見られるしも利欲のためであるが、自家の
脱誤を古書に擬し偽書を著すことも偽書
その例である。それが真実の著者の名を置いてゐるとすれ

八擬作であるとも偽書とし難い例として太宰春臺の產
語の如きものは支那の典籍に擬したものが実は一種
の文体となるべきに師の授徒を面白く看破せし也。
偽書とあらずして偽者と呼ばるるものもある
桃源堂の古今偽書考の北目は東坡志林を
どを挙げたるが、日本にも真本にも杜撰を取つ
て一部の書を編めれもの東坡志林に似たやうなる
ものいくつもあるが、こん等は西其の人の原著と称する偽
本もあるべく、一概に偽書とも雜の類もあるべし。
兎角偽書と云つて書のかつて偽者ひとりにまかせ好
事家や書賈の故意に偽書とするものもあるべ
こんは日本のみならず支那にも西洋にも同様にある。著

著の敢て人を欺く為に執筆したるに誤りあるべく偶々
古るき書、数々偽つて古るき材料を用ひたり
するのみ、疑義書は其の原著者の名を刪除
したるに名の書の人の遺著、それが供したこと
まぬかるべからざるに云ふから誤者は之を偽者と
看做するのである。斯の書物が其の真の著者
名を行はんとするとき、設令ひ記述に誤謬があ
るとも、一概に偽書とはいはれまじ。
内容に誤謬のあるは、すべて其著者を
偽者とするべく、所謂る序義の偽書であつて、書
法をいひ細論を欲し、少しく細別を要する







一枝で価値が七八十銭から百銭位するものは珍しくないほど高價なものである。

この頃はお花が盛んで

如何ではしい部類まで加へると師匠がざつと五千人、春先になるとその連中の展覧會が各所で開かれる。

其ため我もと良い枝物を買ふので、この頃になると日本アルプスや浅間山麓あたりのものも出て、生花市場の相場も相當騰貴する。

寶塚アン喜べ！

おなじみのスター連が

獨唱と合唱する寶塚名曲集

後八時 大阪よりの時

今夜はおなじみの寶塚歌劇團のスター連が、たつぷりと美しい歌を聞かせて呉れます、曲目は今まで寶塚で上演して好評を博した歌謡、レヴュー劇の中から選んだものでま

☆☆☆☆☆☆

ウチユウフンツウ（ハ）支那服の唱（ソプラノ）いにしへの、古の、歌に名高き薬山寺、夜半の鐘の音月かげや、今はむかしにかはらねど、その歌人や今いづこ、アア今いづこ、今いづこ（アルト）有明の、月をしたひてなく鳥の、あはれかなしき薬山寺（二部）いまをむかしにかはらねど、その歌人や今いづこ、アア今

女が小船くどろ川湯宿、紀伊と大和の二筋道よ、立つて思案の三度笠よ、捨てた柳が、流れにうつる鐘がゆさぶる、秋の暮（三）歌謡「酒の行燈」より

おでんエー（久慈一雄作）ちやいな、わしの生れは何處は、上ニウ手ヨウ入手ニ夏よ

凄い汗！

市内だけで年に四百萬圓

豪勢を極む花市場

巳に一輪の山百合！　生花は人の心の糧だとも云ひ、生が知られるとも云はれてるが、西洋風な花瓶の花以四五　寶塚歌劇紹介事項

・〇〇（子供の時間）名作物「アラディンの不思議なラン

☆☆☆☆☆☆

寶塚少女歌劇團樂劇科生徒

各地盆踊第一夜

愚劣極まるラヂオ

コドモの時間では、看人大野喜一郎氏の童話を注意して聞き、大変いいと思つた、コドモの時間やはり二のおさらひの時間を聞いて、教材なり、話術なりに感心するよりは、子供相手の話として聞くと聞き難い事が多い、第一に妙なアクセントの人が多い事、五色つかひの様な妙な調子の人が多い事、目に見えない

白合などの切花まで、一般家庭で使用される切花の量はさう市場を支配するだけのものではないが、花市の相場を最も鋭敏にさせるのは富豪、高官達の不幸の時で

大貧男のお葬式の時には東京の生花の相場が十倍になつた、然しなかしなものでお祝事では花市の相場をつり上げるやうなことはない。【寶塚生花市場の原引き】

の尾花が波の穂の秋の風　佐藤い稚子の人いま
なん夫沒る閑急川の流れを得て蓋衛殿
金の執筆の北斗人の中の和めとかけ先の切り
ぬきハ郭初秋の秋後殿と氣七とるむ出
川ふる家を来ん秋ふんら見れ中ふる一番
しいから、家に取めて夏
五月ハ金ハ氣衛殿と書いれ紅葉山人の一句
とお茶くき　八月十二日
夢の風をふる　ちふるお茶一筆

文化日本を語る
生花のもの凄い消費量
東京市内だけで年に四百萬圓
豪勢を極む花市場

◇◇◇◇◇◇◇

涼風の吹き込む爽かな部屋に一輪の山百合！　生花は人の心の機だとも云ひ、生花の消費量で國の文化の程度が知られるとも云はれてゐるが、西洋風な花瓶の花以外に日本には華道といふ獨特な藝術があるため、俗に枝物と呼ばれてゐる松や楓、ヒムロ、柳等を加へると東京市だけで消費される生花の量は年額時価で三百五十萬圓から四百萬圓の巨額に及んでゐる、その出荷から取引き、販賣の組織等につき市内の生花市場及び代表的生花商組合の二三につき調査して見た……

◇◇◇◇◇◇◇

一枝百圓也
深山から探出して來る枝物
貴重品扱ひのバラ

もとこの花を植て認ち生産增加を來す。それでもいゝのが出來れば問題はないが

元來が田畑專門の農家

のこと、上等の花はなかゝ少い、そして彩色の花はまるで値にもならないことがよくある、アカパンサス等もその例に漏れず、昨年は苦が作り過ぎて値崩れしたが、今年は苦が見搭てたので高騰し、また一本十錢以上にも卸されてゐるといふ皮肉な有樣である。

露地の生花出荷地としては神奈川縣も相當なものだが、信州はまだ珍しいので夏季見出されてゐる。

一體切花の出荷はいつやるかといふと、靜岡や千葉等の遠距離では大抵前日の午後に切り夜半の十二時頃同地を通過する汽車で東京に來る。

自動車で運ぶ安い花は

貨物部に扱はれてくるが、バラやカーネーション等の高價品は、生産者が一人で七八百本づつ客車に持ち込んで持つて來て卸すのが多い。そして所の相場を見て午後の切る量の加減をする。

かういふ生産者は大抵靜岡と東京との間を定期券で通つてゐる位で、花造りといつても農家の片手間仕事位に思つて呑氣な氣持でやれるものではない。

東京新市場の產地では、夏は大抵四時する日の早朝から切り始めて午前六時頃には地方のものと一緒に花の市場に出す。從つて市場のもつとも賑はふのは九時から十時までだ

西洋花で最も量の出るのはスキートピー、フリージヤ、カーネーション、バラの順である。

昔では新潟で非常に價の高かつたものがあつて、バラの切花など十本で十圓や十五圓もしたことがあつた。それにはこんな珍談がある。

一本一圓余の切花が暴利だといふので これを買はされたお客が口惜しまぎれにお巡りさんを連れて「こんな暴利を貪るといふ法があるか？」と花屋にねぢ込んだ、花屋も負けてゐぬ、余りの口惜しさに帳面を警官に見せたら何と十本十五圓也で仕入れたのだがローズになるから元値をきつて賣つてゐることが判り怒ち形勢が逆轉！

カーネーションにも一時は二十本で九圓六七十錢で卸されたものもあつた。さすがこの頃は生産者も賢くなつたから

そんな突拍子の相場は

余り見受けられないが、日本から輸出された菊や高蒲が、西洋菊や西洋高蒲として逆輸入されて高價な切花にされてゐるのはつまらない話だ。西洋花ばかりでなく菊や百合などの切花まで、一般家庭で便用される切花の量はさう市場を支配するだけのものではないが、花市の相場を最も勝買させるのは富豪、高官達の不幸の時で

大貴男のお葬式の時には東京の生花の相場が十倍になつた、然しをかしなものでお祝事では花市の相場をつり上げるやうなことはない。【寫眞生花市場の取引き】

複製禁

東京市内には組合組織及び個人經營の生花市場が二十九ケ所あるが、出荷地即ち產地は品種によつて各々異る。

活花に使用する枝物は

埼玉縣下の赤山が主要な產地だが東京府下からも可成り出荷されてゐる、しかし商賣人が苔付と稱へる古木の感じを持つた枝物は、甲州境の峠、笛川縣奥地、伊豆方面、富山や信州、奥日光あたりの深山から採集して來る。

それには苔付專門に探してあるく商賣人がゐるが、其外にも山から里へ下る炭焼人夫などが切り出して來るものも人つてゐるし、またその道の商賣人は深山からの枝物の伐採權を讓渡されてゐたり、又注文によつてどんな枝物でも切り出して來ることが出來る程山に通じた人がゐる。

殊に正月に使ふ松の古木は、一枝で卸値が七八十圓から百圓位するものは珍しくないほど高價なものである。

この頃はお花が盛んで

如何がはしい部落まで加へると師匠がざつと五千人、素人になるとその數倍の數に會が各所で開かれる。

其ため我も〳〵と良い枝物を買ふので、この頃になると日本アルプスや淺間山麓あたりのものも出て、生花市場の相場も組當度貴する。

今春名勝指定地に指定された佐渡の小木港――昔は男の子が生れると山に捨て女の子が生れると親戚友人が集まつて底抜け騒ぎの祝杯に夜を明かしたといふ女ならでは育たぬ町、それは幾千萬年前に遡られた自然美が知らず識らずの間に人間美への修正を加へたものであらうか兎に角小木は古來女の町として全國的に有名であり佐渡全島藝妓の約八割は今なほ小木の女である、近來このいはゆる小木美人の聲價を一層高揚したものは――かつての紅葉山人の思ひものお糸さんであらう

△

お糸さんは今年六十一のお婆あさん――町の本通りに樓屋といふ小ぢんまりとした質屋がある、そこのお内儀さんだ、金縁眼鏡に小さつぱりとした身だしなみ、くつきりとあかぬけのした顔立は磯石に四十年前文豪尾崎紅葉を惱殺した魅力がまだ幾分殘つて居るやうに見える

△

紅葉さんが佐渡へ來たのは明治三十二年の七月中旬三十二歳の男盛りお糸さんが二十六の時であつたそれから二週間

△

〝こいといふ人われ佐渡は涼みどこ〟と短冊にあの名句を認つてお糸さんに示し料亭福屋の二階からほとんど一歩も離れなかつたといふのである

△

このお糸さんを小木町に訪ねて紅葉山人との秘戀の思出を聞いたのである（寫眞は紅葉山人と當時のお糸さん）

巷に畫く愛の葛藤

見事に贏得たお糸さん

尾崎紅葉の秘戀を聞く（2）

お糸さんは、その昔の華やかなり し時代をしみじみと語るのだ

△

今の小木は漁業が四五軒、料理屋が四五軒、藝娼妓は二十人足らず のさびしいものとなつてしまつたが、私の若い時分（紅葉が島をおとづれた頃）の小木は藝娼妓の數は百二三十人居つて賑やかなものであつたと考へると

△

無なやうな話しだが小木は昔の吉原風で藝者より娼妓の方が優式があつたものでした、藝者から娼妓にといふ出世の階段がはつきりしてゐました、さういふ譯で今の商賣人（藝娼妓のこと）とは違つてお座敷がかゝつてもいやな客ならサツと斷つたものでした

△

お糸さんは少し高慢な女であつたつてしまつたのだ

△

『先生（紅葉）が來た』と料理屋と町の人々は呼んでゐた、だから山出しの若衆達では話しが合はなかつたのだらう、そこへ紅葉が相川の鵜山祭に踊りつかれて澤根から舟で兩白い顔をして七月の十五日小木へ出たのだ、お糸さんは相手がつとまるといふ自慢と自惚れで無條件で紅葉さんがすきになつてしまつたのだ

△

『先生（紅葉）が來た』と料理屋といふ料理屋で町長の伊藤文治さん校長の風間貞太郎さん達が發起で盛大な面識會が開かれた、そして小木、羽茂方面から大勢な藝者を呼んで十六足踏り（おけさ踊り）をやつたがどうした譯かお糸さんは呼ばれなかつた、その前々夜こんざやの二階で騒ぎ合つたお糸さんだ、そして紅葉さんも大變氣に入つたといつてゐたのに？――今夜はどうして呼ばれないのかしら、かう嫉いて女の早やくやしい涙に泣きぬれたお糸さんは藝を忘して鍋屋に居る紅葉さんの側を連れて鍋屋に居る紅葉さんに文を送つたのだ、すると『いつまでも待て必ず行つてつかはす』といふうれしい返事が來た、この返事をしつかり抱いてお糸さんはいつまでもまつた』

△

町長は羽茂村の島西藤さんや風間個一郎さんの紹介で料理屋のお竹さんに、今また愛くるしい大料理屋のおもよさんに引かれて通はず紅葉は泊るとにしてゐた、そこへお糸からの手紙が行つたのだその手紙がまた文學的だつた、ハツとお糸さんのことに氣がついた

紅葉はおもよさんの居る前で返事を書いた、しかし文字をしらないおもよさんには何んにもそれがわからなかつた、それがまた埒もなく紅葉をさびしくした、そして紅葉はそつと床をぬけ出し驛に待ちぶせてゐるお糸さんのもとへ來たといふのだ

△

紅葉さんがお糸さんを氣に入つたのはその標準よりも文筆の素養であつた眞劍な愛情であつた、惜しく奪はれやうとした愛人を奪ひ返したお糸さんとそれからの紅葉さんとの仲はいよ〳〵深くなつて行つた

〝こいちやー〟で

一度だまされて

また來いちやでだまされのか

今も殘る三味線の胴に書かれた歌は

風間さんと葛西さん（お糸さんは羽茂の物ずき連中といふ）が大部屋のおもよさんに頼まれて先生を奪ひ返しに來た時紅葉さんはアッサリ斷つて『す、疲れた』とお糸さんの膝を枕にたぬき寝して二人を騙した、その後で枕邊にあつた私が一番大事に（大切に）してゐた三味線に何んにもいはずにすら〳〵と書かれたものです

△　△

かうして小木港に揺かれた愛の葛藤は、紅葉と共に小木町の夏の夜の話題を賑はしたのだ（寫眞は紅葉が書いた三味線と當時二人が腕染んだ料亭藤屋座）

西鶴とセクスピヤとお糸、お前が好きさ

尾崎紅葉の秘戀を聞く（3）

お糸さんは紅葉の印象を思出しながら色々と語る

△　△

『先生はお酒はほとんど召上りませんでした、そして朝から晩までお茶と煙草ばかりをやつてゐました、煙草はその頃流行したビンヘットを特に好んで喫みました、お酒を召上りませんので、こゝらい

△　△

先生が羽茂の葛西さんや風間さんと連れ立つて鮎釣りに出掛けた時でした

△　△

ふ思出に繋るやうなこもありませんでしたが、一度こんな面白いことがありました

△　△

茂川漁業組合員の中原傳右衛門といふ爺につかまつて仕舞つたのでした、何しろ解禁前なんですから規則を犯してゐる訳ですそれに傳右衛門爺さんときたら近郷一のやかましやと來てゐるんだからたまらないカン〳〵に怒つて鮎を皆んな取上げその上小木の警察署へ突出されたのでした、しかし警察でも先生だつたので何事もなく納まりましたが何しろ日本一の文學者が警察へ呼ばれた時の見つともない事つたらありやしませんでしたと當時の紅葉さんの狼狽振りを思ひ出してか、瞳の底からこみ上げて來るをかしさにたへ切れぬらしくお糸さんは小娘のやうに笑ひくづれた

△　△

紅葉山人は歌は大きでもつたと

いふが聲がドラ聲なので人の前では滅多に歌はなかつた、そして二人切りになるときまつて都々逸を唄ひ出した

〈月については居られぬ

〈わたし泣いて別るゝ時鳥

〈わしの好きなは世界に二人井原西鶴セクスピヤ

『それにも一人お糸さん』とつけ足したりなどした、また戯舞が大すきであつた

おれの外に劍舞なんかやれる者は佐渡へ來ないだらう

と冗談をいひながら舞出すのであつた、一番得意は『嬉月』でお糸さんが紅月の謡ひ人の袂をうるほすと時ずれば紅葉さんが舞つて夜をふかしたとも幾度あつたか知れなかつたといふ

△　△

かうして紅葉山人は小木港留半ケ月――露ぬ名殘を留めて七月卅日車にも乘らず六里の道を新町へと向つた、別離の悲しみをぢつと共に村山街道一里あまりの所まで見送つた

△　△

『千なしと拭いて貰つて別れけり』

はこの時の句である

△　△

新町港留三日間、佐渡の傳者酒古山本半藏さんと意氣投合になつた、二人で十王堂の縁日に佐渡特有の野呂松人形を見に行つた、紅葉さんは人形の珍しさにすつかり感了されてしまつた、そして

野呂松がのそりと出たり夏の月

といふ有名な一句が出た、今十王堂境内に花崗岩で立派な句碑が建てられ永く記念されてゐる

△　△

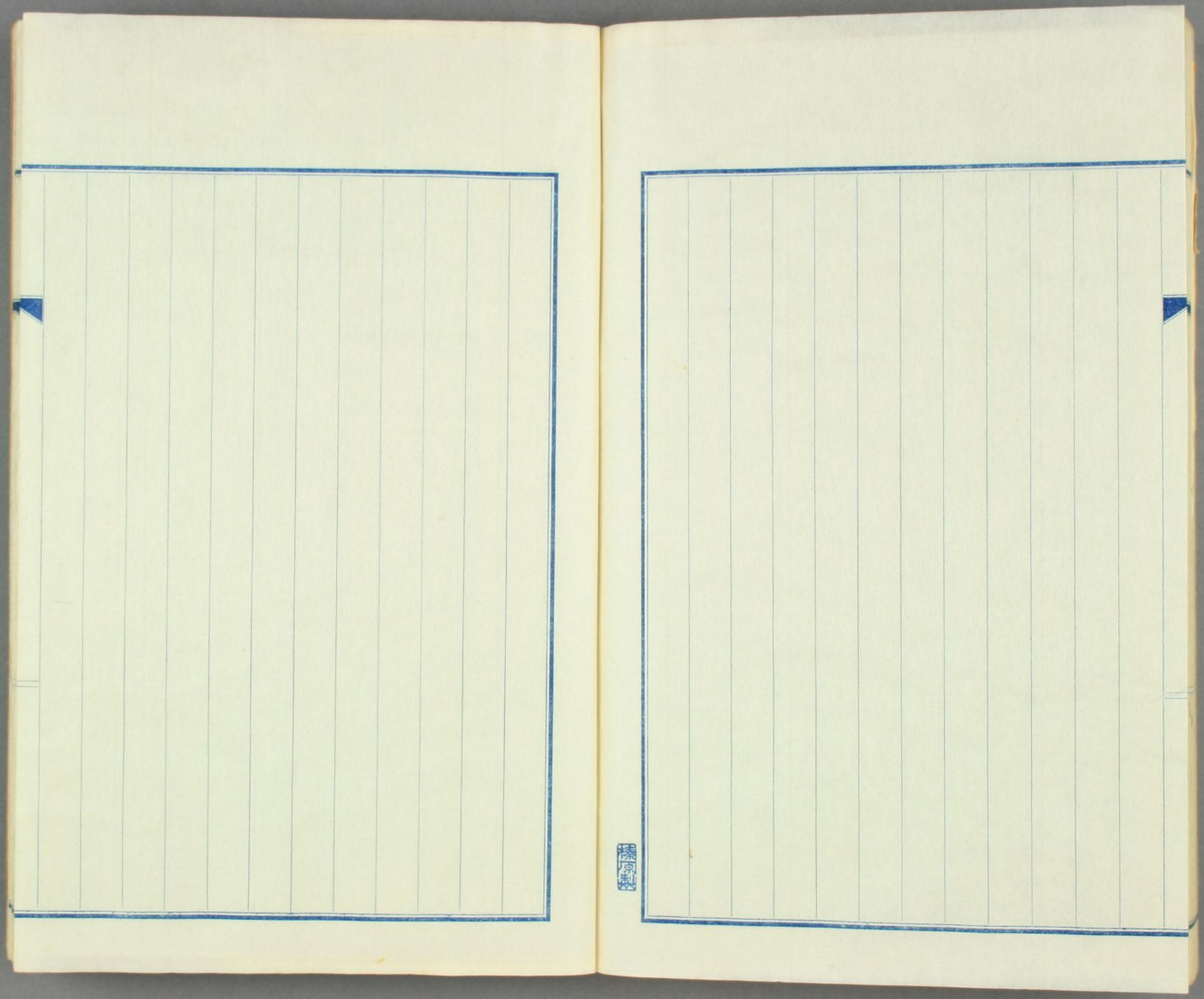
新町を立つて畑野新穂を過ぎ兩津へ出た、こゝから半紙四五枚を綴つてお糸さんに發信した、その手紙についてはお糸さんは

お前を他人とは思はない

といふ一節を繰るのみで深く口をつぐんで黙に閉らうとはしない

△　△

明治文壇の花形尾崎紅葉逝いて既に三十年今その思はれものお糸さんは小木港にいつまでも健在である、そして『いつまでも待て』の言葉を繰返しながら昔の夢を思出してゐるのだ（寫眞は現在のお糸さんと野呂松人形句碑）



自分は長い間、貴社諸君の読者で、朝日宗の信徒とまでいえる。
あるときに貴社と負う所があるといい、紙面にも義理(恩)がある
[illegible]、或いは世界の識論がどうあろうが、自分は
ど[illegible]信者[illegible]の絶対服従は是非の論いらない。世界を匡傳を
えるい大新聞を発行して提新聞界に新聞を唱えてみる、貴紙
の論説や報道の優越性にあることは申すまでもないが、貴社
のことく大勢力を新聞界に有することとなると、どんな新型を
創始[illegible]するかを思うのまでもなく、一般新聞[illegible]の新報とまで得
るのであるこれを思うと、自分[illegible]あのの嘱望が
まいかるまい。自分は新聞の本分は起逆俗衆の上に立つて
指導すること[illegible]ないと思つて
[illegible]

理に投じて行かぬ所、成り立たぬことを知らぬものなし。新聞紙
一の警告であつて、日陽春白雪でいい気になるべきものに隠
つて俗化せぬ者なしとせば、知らぬ者の集会の
よいのが勝を制するから、大衆の意を迎へ
意比。大衆思想の新潮の動きと共に、
ハ此迎へ方であつて、俗大衆の迎へ合まることが甚しければ
甚しいだけ此の非難が強まる。別に操觚界と両輩権を
握る底の新潮は新しく此の非難が発かれる。名意を
へるべきまた補子を低くめずるも押切つて行けるのが大新潮
の風潮であるからだ。大衆と和して行くなら提撕話
稍も出来ないのである。唯だ和して流れぬ所を立大切さが
ある、事実程度の問題で自合をする大衆と和す
ることを非とすることのないが大新潮だけを地歩を保つ変
どこかに

があつてもわしいと思ふ。大きい事は就て政権を河内すること
が操觚界としての大羞恥で且つ大の風化の及ぶ
所人心を腐敗する事こと就ての日本社会の出
来事で俗衆の興味を惹いたことも、其の示唆が国体を変
ずることといふ事は、大新潮ハ其の品位の上からも取捨を要する。現世の出来事に対しても
問家の大事件、大衆迎合を業を操ひ
多くの紙を費すならば如何に大衆の迎へ合まることが
営業の秘訣であるとも大新潮の見識を
不似合の事である。社会の風教を維持することが何等の
大新潮の責任であることを事を忘れるものが紙面を汚濁すること
といふ大新潮だけのことを出来るハ
九拾八ページ乃至二百頁を占めることとき

もの、往々見くさることは日本特有[illegible]び、新芽の出葉の枝
入いこんでも生まれ[illegible]が、殆り体裁のよいものびたる
多くの紙を要する不便渇もあるべし、まんべんの紙と有無況
ご理めれら後者を差するもの多あらう、廣告掲面の制限の
始きも勢力ある大新聞もけんべん断し得ざる業び掲面
を制限して制限前と同枝の料金を徴まんべんの花の枝目
[illegible]かるべく。廣告の形が俗力さんを[illegible]効力まい書[illegible]ひいなが
い。此等のことも大新聞の幸先を一番あるべ。大新聞の紙を示
[illegible]池[illegible]追随し来ることは勿論びおのを此等の数を本
んべいるくあらうが、見合等の改善を欲する點は多花の枝
[illegible]既に熟知の事もあり、唯だ改善を断する時機を待
[illegible]とが、[illegible]花の新疎むあらうが、自分は幸直
に断を望む外又何人の笑[illegible]有つてあらい。

此一篇は本紙の[illegible]の[illegible]
[illegible]おく、

宋板鑑定法

長澤規矩也

宋板鑑定法――大分物知りぶつた、人を食つた題目ではあるが、人から問はれた答へとして、予の覺束ない知識をまとめて見る。實際問題から云へば、あまり一般の役には立つまいし、要は鑑定に携はる人の眼の問題にはなるが、こんな鑑定法もあることを記して見よう。

宋板らしい本がこゝにあるとする。それが宋板であるかどうかを決定するのにはどうしたらよいか。從來の人は全く眼にのみ賴つた。丁度書畫の鑑定のやうに、一瞥した時の第一印象に重きを置いた。先づ字體、次に墨色、紙質などについてゞある。字體と云つても一樣である筈がない。坊間で一番多く見受けられるのは、宋末の建安の刊本である。それは、本會刊行の宋本書影や、靜嘉堂の宋本書影を見れば判るが、文字の角に特徴を有つた、角が一寸太く、横線の畫は特に左右の端が太くなつた、そして文字そのものゝ全體の感じで、筆に圓みを帶びたものである。坊賈などは、見なれた宋板がかゝる建本―建安刊本―の俗本ばかりであるので、宋板と云へばかゝる劣等の本を想見するのが常である。然るに、坊間には殆ど出ない北宋刊本になると、むしろ所謂明朝活字に似てゐる。宋本書影中の姓解など見ればよくわかる。南宋初年の杭州刊本もそれが少し崩れた位で、大體杭本は宋末に至るまでさう字體も崩れず、南宋臨安の坊刻本、即ち所謂臨安書棚本も、建本よりは北宋本に近い。だから本邦の坊間では、宋本中で劣つた建本が出る時よりも、優つた北宋本の出る時の方が、所謂掘出しが出來さうである。尤も北宋本なんか、殆ど出ないにきまつてはゐる

けれど。

墨色はよい本になると、漆のやうに、濃くて光澤があるといはれるが、これは一寸素人の鑑定の標準にはならない。

紙質も一樣ではない。宋末の建本や元刊本では、我々の見なれてゐる薄い弱い黃色の唐紙がかなり多いが、色の白い、引の强い紙がかなりある。薄手の紙もあるが、厚手の白い紙などは、日本紙とまがふ位である。その爲に五山板と宋板とが混同せられたことは過去に於て少くない。例へば內閣文庫所藏の有名な南宋初年刊本の周易新講義や、高郵軍學刊本の淮海集が、一時日本古版と考へられてゐたのなどは手近の實例である。序でに述べるけれど、元刊本にも趙松雪體の小字本のみではなく、大字本で、紙もなか〳〵厚いものがある。そんなのも、大型の唐本を見なれぬ圖書館員によつて、明の官刊大字本と共に、朝鮮板と考へられることが多い。又元の大德頃の刊本には、普通の大いさの本でも、字がそれほど小さくなく、體も圓みのないものがあり、明板と間違はれるし反對に、明も正德の愼獨齋刊本、天順の游明刊本は固よりのこと、成化頃までの精本には、元刊本の遺影があつて、元刊本と誤認せられることがある。生半可の知識で鑑定すると、凡そこんな誤をしでかす。まして、宋末元初、元末明初など、判然しないにきまつてゐる。

匡郭、即ち每葉の文字外の輪郭について、太い細いの二線があるのが雙線、雙邊、雙闌で、之に反して、太い一本の線から成立つてゐるのが單邊であつて、宋板には雙線がないなどと說く人もゐるが、誤りである。或は、北宋板に單邊が多く、或は、單邊と雙邊との中間に位する上下が單で、左右が雙の、左右雙邊がかなり多く、ほんとの四周雙邊は例が稍少いといふに過ぎない。宋板の每葉の行數と、每行の字數とが一致するといふ說などに至つては採るに足らない。行間の線即ち界線は大藏經を除いて、あるのが大多數であるが、これも絕對ではなく、殊に元板以降も同樣である。

日本で柱といふ、每葉の中心になる、書名卷數などのある狹い部分を版心とよぶ。その上下方が白地のまゝの時

には白口といひ、黑地又は黑線のある時には黑口といふが、これも宋板は必ず白口とは云へず、宋末には黑口本があるから、鑑定標準にはならない。

白口本の時、上方にある數字は、大小字數といひ、大體每葉の字數で、刻工の覺えらしい。字數はよく實際と一致しない。下方にある姓名、又は姓、又は名は、刻者姓名で、其頁の刊刻職工の名である。版心に字數刻工のあるのも、宋板に多い特徵ではあるが、元明淸の刊本にも往々あるので、是亦その有無を以て宋板なりや否やを決定することは出來ない。

以上、宋板と元明刊本との差を少し述べて來たが、今はそれよりも、宋板の中で、何時頃のものか、何地の刊行かといふことを鑑別する方法を述べたい。これも、從來は全く記憶に賴つて、眼と頭とで、何時何地の刊行だらうとやつてゐた人が多い。刻工を他書と比較して、結論を出した人もあつたが、それは、記憶又は小範圍のものに過ぎなかつたやうである。又宋板には闕筆と云つて、天子の御名の字をそのまゝ刻すことが出來ずに、多くその末畫を闕いた。後には嫌名とて、音聲相近い文字も闕かねばならなかつた。又臣下が己の父祖の諱を闕いたこともある。これは家諱といつた。その闕筆に漫然と言及して、時代を決定した人もある。

併し、今日はそんな、よい加減ではいけない。記憶にのみ賴るべきではない。缺筆と刻工とを徹底的に調べて、科學的に研究して行かねばならぬ。予は年來その方面にも志した。本誌一月號にものした「帝諱闕筆に基く宋刊本鑑定に關する注意」は其研究中の一結果で、二月號に載せた宋刊本刻工名表初稿は其研究の道具として作つたものである。闕筆については、一月號に述べた如く、宋刊本の闕筆は前朝に止めたことが多いやうで、それに就いては再言する要もない。たゞ、前にも言つた如く、闕筆が絕對的のものでなく、闕筆の少い宋板、又同一字を闕いたり闕かなかつた宋板があることを知つてゐなければならぬ。今上の御名は、今上御名、御名などと記して御名の字に代へてゐるものであることも、一月號に於て述べた。

刻工に就いては、あの表を按じて、同一刻工が數人出る書名を寛め出し、そしてその書の刊年から、疑問の書の刊年を推定するのであつて、その實例は三月號に於て、廣韻について述べておいた。

さて、刻工闕筆の調査は、彼此相竢つて疑問の書の刊年決定に役立つものである。時には廣韻のやうに闕筆によることが全然出來ぬものもあり、刻工が刻せられてゐない時は勿論避諱のみしか科學的方法はない。

但し、如何なる場合でも、初印本、即ち初摺本の宋刊本は非常に珍しく、後世の補刻が一度ならず、甚しいものは數次に及んでゐるのがある。故に補刻の存在を無視して鑑定にかゝることは出來ない。

補刻の有無を決定する法としては、各葉の印刷面に著しく、明瞭か不明瞭かの差があるかどうかを檢するより外はない。これは易しいやうではあるが、實際にはかなり難しい。一度補刻を施したその時に印刷したものは、補刻の頁が初印本を見るやうにはつきりと、美しく見えるからわけもないが、かゝる場合には實際はあまり遭遇しない。多くは、補刻した時よりも遙に後になつて印刷せられたものである。其爲に補刻紙葉もかなり板がいたんで、原刻と大差なきまでに至る。殊に補刻が一度ならず二度三度と重つた書では、各の時に各葉を鑑別することは非常に難しくなる。字體も相互にかなり異なるから、此際役立つが、字體は刻工によつて著しく巧拙が生じ、線の太い細い、圓味を帶びるか否かの差があらはれるから、注意を要する。

こゝに、補刻のある宋刊本に就いて、刻工闕筆兩方から原刻のみならず、補刻の刊年も大體知り得た實例を御紹介する。それは、靜嘉堂で善本書の解題をしてゐる間の經驗であるが、眼と頭とで決めるのでなく、歴然たる證據を記すやうにとの主任のかねての依頼は、本書の鑑定に四時間近くを費させた、併し、うまく理論的に證明し得たのは面白い。その結論を導き出した過程を記して、我々は宋板を如何に取扱つて行くかを示さうと思ふ。

靜嘉堂に北宋刊と題した左傳がある。陸氏の藏書志卷八には宋刊蜀大字本とあり、靜嘉堂祕籍志卷二には宋蜀大

字本左傳、北宋刊十六本と記されてゐる。これが北宋刊本でなく、元以後の修版があることは一見すれば判る。

さて、それを科學的に理ぜめで證明することになると、まづ原刊部分を採り出さなければならぬ。それが厄介なことで、原刊か第一次の補刻かを定めることが、頁によつて頗る困難であつた。まあ原刻と思へるもの、それらしいかと考へるものを拾ひ出すと、

序	二	五		
卷一	二三	二四	三五	三六
三	一〇	一一（下方補修）		
五	二七	二八	三三	三八
七	二八			
八	一			
一〇	二	八	一八	二三

等となる。

そこで、先づ闕筆から調べて行つた。ところが、愼字を闕いてゐるのを見出したから、北宋刊本でないことの立證は濟んだ。それなら何時まで下るか。愼が孝宗の諱であるから、次の光宗の諱の敦字を檢べて見た。然るに左傳の本文中に、敦字の出るのが至つて少ないので、やつと、原刻らしい頁に、敦字の闕かぬのを見出し、又嫌名の鶉字も闕いてゐないのが知れた。そこで、大體、闕筆は愼字に止まるといふ結論が出たが、前述の如く、闕筆は、時に闕き、時に闕かぬことが、同一書中に共に見えるのであるから、これのみで、時代を定めることは不可能なのである。よつて、次に刻工調査といふ、別の方法を採つた。

それには、先づ、原刻頁の刻工の姓名を書き出して、之を二月號に載せた宋刊本刻工名表初稿と比較して、三月號の廣韻の刻年の推定の場合にやつたやうに、何れの書と刻工が多く一致してゐるかを檢べた。其結果、

舊題北宋刊本廣韻（三月號所載）と一致するもの

徐杲　包正　阮于　毛諒　余永　姚臻　陳明仲

北宋刊南宋修本外臺祕要方と一致するもの

徐杲　林俊　阮于　陳文　章楷　丁圭　李碩

杭州刊本前後漢書と一致するもの

王榮　林俊　毛諒

杭州刊本陳書と一致するもの

王恭　宋琚

杭州刊本玉篇と一致するもの

吳益　宋琚　高異

杭州刊本廣韻と一致するもの

君益　余敏　陳壽　高異　宋琚

明州刊本文選と一致するもの

陳文　丁圭

一致する書の殆ど全部が浙中の刊本なることによつて、本書亦浙中の刊本なることが知られ、而も以上各書が孝宗・光宗間の刊本なるによつて、慎字まで闕筆せる事實と共に考へて、本書が光宗の紹熙頃の刊本であることを知ることが出來るし、三月號所載廣韻の刻年推定の際の考證（一三頁）を用ひて、間接にこの結論に到達することも出來るのである。

これで、本書の原刻の時代がほゞ紹熙中に在つて、刊行地が浙中であることも判つた。

序に、補刻の刻工を、宋及び元の刻工名表と比較して見たら、周東山・袁子寧・朱元・朱長二・楊景仁・雇恭等の刻工は、元の延祐中饒州路學刊本文獻通考の版心に見えてゐるから、これで、本書が延祐頃の補刻であることが知られた。

以上、こゝに述べたことは、流行の言葉でいへば、科學的の方法によつたわけである。但し、この科學的研究法とでもいふものが、絶對的に正確なものではない。上例はうまく理ぜめで正しい結論が出たが、それはやはり眼と頭との力と相竢つて始めて正しいと云へたのである。何となれば、精密に刻せられた覆刻本にあつては、闕筆だつて、刻工だつて、原本と同樣である筈である。僞造の精巧なものに至つても、一應理ぜめでは破れないやうに作られてゐるものであるから、結局は宋元本の鑑定法でも、鑑別者の眼識が大切で、所謂科學的鑑別法は眼識を援ける證據にしかならぬ。本書に於ても、更に卷十二の第七・八葉の刻が拙であるから、それは明代の補刻だらうといふ說は眼の力に他ならない。（七月二十二日）

木堂先生書簡集（其二六）

（山浦貫一氏藏）

物徂徠贈位の件

（犬養先生の鳩山内閣書記官長に贈つた御手紙は、勿論田中内閣當時のことであつて、消印に據れば昭和三年七月二十六日である。西洋角封筒に三錢切手二枚はつて、

麹町區永田町總理大臣官舍、鳩山書記官長殿　親展——犬養毅とある。內容は、今上陛下の御大典に叙位叙勳等の御儀あるに際し、荻生徂徠に對し、贈位の儀を田中首相に進言して貰ひたい、といふのである。全文左の通り。——山浦生記）

拜啓　今秋の御大禮にも例の如く學者など＝御贈位あるへき＝付東京府知事より之を申請したる中＝荻生徂徠を加へたる趣傳聞致候是ハ尤も適當と信する處＝候然る＝文部省＝ハ反對の人もあるや＝承候

右＝付小生首相＝面陳致度候得共小生が首相訪問する毎＝新聞記者＝付き纏ハれ困却＝付貴兄より首相＝進言され度御願致候

從來徂徠の贈位＝漏れたるハ彼の東夷物茂卿云々が原因なれど是ハ平田篤胤が全く徂徠の文章を讀み誤りたる也平田篤胤の徂徠攻擊＝云ふ徂徠文集の孔子像贊＝東夷物茂卿とありと是ハ眞赤ナ誤リ也

孔子像贊の款識＝ハ大日本國夷人物茂卿薰手敬題とあり夷人の夷ハ平夷の夷にて平人卽ち布衣の義也平田は漢字＝暗き人なるが故＝夷人の夷を夷狄の夷と誤解したるならん

又徂徠は斯る事＝ハ全く正反對の意ある人にて其隨筆南留別志に入唐二字不當なるを論して曰く古來の國書＝入唐使の名あり入は入覲なり屬國が入覲する也日本ハ隋唐と對等なるが故＝入覲ハ爲さず隣國＝使節を派遣したるのみ古の博士ども

王榮　林俊　毛諒

杭州刊本陳書と一致するもの

王恭　宋琚

杭州刊本玉篇と一致するもの

吳益　宋琚　高晟

序に、補刻の刻工を、宋及び元の刻工名表と比較して見たら、周東山・袁子寧・朱元・朱長二・楊景仁・屈恭等の刻工は、元の延祐中饒州路學刊本文獻通考の版心に見えてゐるから、これで、本書が延祐頃の補刻であること

の事體を辨ぜざる此の如きハ笑ふへきの至り云々

其外にも例證あり徂徠ハ實ニ寃罪也先皇御即位の時ニ徂徠の門人たる山縣周南丈けハ贈位の恩典ニ浴したれど其余の徂徠門ハ全く除外せられたり當時僕は京都にて之を論したる事あり此度ハ千古の寃を雪てやりたし

玆ニ辨明したき事あり當時小生の論を評し犬養は漢學者の家に生れしとの事なれハ必ず徂徠派の家ニ生れしならんと僕ハ私情で徂徠を辯護するにハあらす僕の家は徂徠派の正反對たる山崎闇齋の學統に屬し幼時より徂徠の攻擊を耳にし居たるなれど無實の罪は彼の爲めニ辯護せざるを得す徂徠の贈位若し尙出來れハ徂門で尤も經學の造詣深きハ信州の太宰春臺(純)なり之にも御贈位可然已ニ周南へ御贈位ありし以上春台にも與へらるゝが當然なるべし

右首相へ御進言可被下候

廿五日夕　犬養毅

鳩山君

（編者曰。近、湊谷南氏共、秋田縣の人、共に縣會議員たりしことあり、國民黨時代の有力なる地方同志であつた。御書簡は同縣多額納稅議員改選に際し、一時支部内に兩論對立したる時のものに係る。所藏者恭三氏は傳之助氏の令息也。）

今一度御相談申上度

（湊谷恭三氏藏）

敬啓再度御會談致度と存し名倉屋へ問合候處已ニ御歸縣のあとニ相成候御來談の事ニ付本部ニ於ても種々善後の方法協議致候得共妙案も得られす兎ニ角今一應御相談申上度と存候ニ付近日誰れか參趨可爲致實ハ幹事長鈴木梅四郎君を煩ハし候筈の處此三四日間ハ市會選擧問題にて手離し兼候ニ付其都合を謀り貴方便宜の處ニ出縣御暢談可申上候内々御含置可被下

冷泉爲恭について

野坂　鐵

爲恭をタメタカと呼ぶかタメチカといふか、それともタメヤスといふかといふに、私はいま遽かに定めかねる。近頃はタメチカ説が有力であるやうであるが、私は聞きなれたまゝタメタカと呼んでゐる。さういつた方が押韻して美しく聞え――これは私だけのことかも知れないが――何となく爲恭の好尚にもあつたやうに思はれるのである。奥田抱生先生は爲恭門下の名古屋の佛畫家鬼頭道恭から聞かれたとしてタメチカが正しいやうだと云はれたさうだが、また別にこれに執してゐられたやうでもない。爲恭自身「田米知加」といつた外に「堂來堂加」と書きタメタカといつたことは、いつぞやの國華倶樂部の講演會で久保田晝伯の述べられた如く、これは「ためたか」の落欵あるによつても明かである。初めタメタカといひ後タメチカと改めたといふ説もあるが、寡聞にして充分の確證を得ない。識者の御教示を仰ぎ度い。もしさうだとすれば何日頃からさう改めたか。或は何か特にタメタカを忌むべき理由があつたものか。襖繪を以て名高い岡崎在の大樹寺ではタメヤスと呼んでゐる。あれを畫いたのは安政四年爲恭三十五歳の時だから、その時分にはタメヤスといつてゐたものらしい。大村西崖先生の「土佐繪中興の名手岡田式部」（本誌七十號）によると、自分の氣に入らなかつた作には「田米知價」の署名をしたといふ話であるが、さうすると「田米堂佳」は出來のよい方ででもあるか、呵々。

關西ではいまだにタメヤスの稱呼が行はれてゐるやうであるが、いきなり俗稱なりと卻けてしまふのも如何と思ふ。恭はウヤウヤシ、タカシ、ツヽシ、タヾシなど訓むが普通だが、ヤスと訓ませた例もないではない。現に爲恭の最も信頼してゐた大行滿願阿闍梨も『梵學津梁總目』の卷尾の手記に

本所衆管原爲恭ハ余カ畏友ナリ。狩野永恭其同氏ノ子ナリ。幼ニシテ家君ニ隨テ其家風ヲ學ビ、十一二ニシテ省語スルコトアリテ家風ニ背キ大和繪ニ志ス。巨勢氏及信實朝臣鳥羽僧正ハソノ所「爲」師ナリ。日夜孳々トシテ分陰猶惜、覃思刻苦十數年。コヽニオイテ其技大イニ進ミ、畫風尤古雅淳朴、自ラ大和繪中興ヲ以テ爲ニ己任ニ云々と、

よく爲恭の風格を盡してゐるが、この中に永恭とあるは勿論永泰のことである。願滿程の人が泰を恭と書き誤つてゐるといふことは、やがて爲恭をタメヤスと呼んだといふ反證にならぬでもなさうである。父が自分の名の一字をその子に繼がせようとするのは極めて自然の情であるからである。逸木盛照師の説によると、彼が冷泉爲恭と名乗つたのは、二十一歳の時父永恭を失つてから間もなくといふことであるが、祖父傳來の繪師の家に生れそれ迄に何も雅號がなかつたとは考へられぬ。タメヤス説はこゝゐらに胚胎してゐるのではあるまいか。日本人名大辭典などのタメヤス説をとつてゐるのは何によられたものであらう。

いづれにせよ冷泉爲恭とはいかにも彼自身の好尚をあらはした美しい雅號である。爲恭の名は冷泉（レイゼイ）の姓について極めて端麗、しつくりと美事な落着をなす。冷泉家は云ふまでもなく北藤原の一家、定家、俊成を出した所謂御子左家の名門である。しかもこれを名乗るからには彼自身にもそれだけの謂はれがなくてはならぬ。西崖先生の語るところを聞くに、

これはその外祖父梅僊が元と本願寺の坊樣であつて、西本願寺御堂前の明覺寺の役僧をつとめ、同寺の娘のほゝのといふのを娶り、明覺寺は古くから冷泉家と姻戚の關係があつたからだといふ事である。又一説によれば爲恭の母は永泰に嫁する前、冷泉家に事へてゐた。それが爲めに爲恭が冷泉などと稱したのを冷泉家から責められた所が、爲恭は我れは冷泉家の落胤であるから斯く稱するのであると云つて、改めなかつたといふことである。

事實は知らない。しかしながら當時にあつてみだりに冷泉などの姓を冒すことは、やはり公には憚らねばならなかつたと見るのが穩當であらう。冷泉家には前に冷泉爲泰がある。タメヤスの名はかくして控えなければならなかつたのかも知れない。私はこの署名あるを見ない。

爲恭が正六位下式部大錄になつたのは嘉永四年爲恭二十八歳の時であるから、彼が藏人所衆岡田出羽守の養子になつたのはそれより數年前と考へられる。爲恭は金五十兩を出してこの株を買つたのださうである。これから堂々と岡田式部と稱し、岡田氏の家紋が梅花なので姓を菅原とした。タメタカをタメチカと改めたとすれば、これがその機緣ではなかつたかと想像される。兎に角彼の世俗的な名譽欲もこれで一段落ついたやうなものの、しかし朧を得て望獨するは人の情である。爲恭はこれを踏臺として益々公卿諸家の間にとり入つた。そして卅二歳には式部少丞關白直廬に進み、文久元年近江守を兼任するに至つた。彼が直接眷顧を負つた公卿は九條尚忠公始め所謂公武合體派に多かつた。又好んで京都所司代酒井若狹守の邸に出入し、長野主膳等と交はつた。よい意味でも惡い意味でも爲恭は野心家であつたらしい。それが後年彼をして不幸なる日和見主義者の道をとらしめたのではなからうか。この點慷慨家の一蕙などとはあまりそりが合はなかつたものと考へられる。爲恭は梅僊に伴はれて一蕙を訪ね、それからも交りを續けたといふが、特に一蕙を師としたといふ程のこともないらしい。一蕙が『狐怪（コレクワイ）草子』を描いて和宮御降嫁の事を諷して獄死したのは周知のことである。文久二年六月廿三日九條尚忠公は關白を罷められ、同日主膳腹心の島田左近の四條河原に梟首さるゝ等、折衷派の敗北は最早決定的であつた。かういつた場合、最も憎まれるのは裏切物と眤まれたものである。さらでだに臭いとされてゐた爲恭は、献毒などといふあらぬ嫌疑さへ蒙り、元治元年大和丹波市（イナバ）在に潛伏中を大樂源太郎等のために斬殺された。

爲恭が冷泉姓を冒したと見られるのは、丹波市で非業の最後を遂げるまで、四十二年の生涯のうち五年かそこらの比較的短い間であつた。それだのに今日では冷泉爲恭の名の方が廣く通用してゐるのは、人もまたこの名を好むかに見える。今日彼の大作としてのこつてゐるものには、大抵菅原朝臣爲恭として、それに長たらしい官名を一行に上代樣の得意の字で謹書してゐる。能書で殊に草假名が美しい。これは特に冷泉家の爲家あたりの書を學んだものだとさいたが、さう思つて見ると却つていぢらしい氣さへする。

メートル法實施の失敗

醫學博士　志賀　潔

大正十年に度量衡法を改正して「メートル」法を採用する事となり、その後十四年間にわたる準備時代を顧みるに幾多失敗の跡を印してをり、今日に至つては「メートル」法論者の主張は、完全に敗れてゐると思ふ。左にその失敗の跡を簡單に述べて見よう。

片假名では冗長に過き而かも適當の漢字なし

「メートル」法が初めて議會に現はれたのは西歐萬能の夢醒めやらぬ時代であつたから譯もなく贊成の拍手を送つた人々が多かつた。

然るにいよ〳〵「メートル」法を實施せんとするに當り、先づ問題となつたのはその書き方であつた。これを日本の假名で「メートル」「グラム」と書く。尺及に比べて冗長だ。が、これくらゐはまづ我慢するとしても「センチメートル」「キログラム」となると如何にも長たらしく話一つするも書くにも煩しい。そこで度量衡の實地指導に當つた人々が會合し、智慧を絞つたあげく「グラム」は瓦「メートル」は米の字をあてはめた（勿論これはその以前から一部學者間に用ひられてゐたものを採用したのである）更にデカ、ヘクト、キログラムを表はすに瓦偏に十百千の字を配した新字を造り、また同樣にデシ、センチ、ミリグラムと下へさがる方へは同樣に分、厘、毛の字を瓦偏に附けて新字を造つた。同じやうに米にも粁粨、粁。及び粉、糎、粍といふ新漢字を考へ得々としてその悧巧さを誇つてゐた。

しかし之は「メートル」論者から見ると馬鹿らしい考案と謂はねばならぬ。あの人々は悧巧な智慧に溺れたのである。何となれば「メートル」法主張者の田中館博士は有名なローマ字論者である。又、漢字廢止を高唱してゐる人である。この人の主張する「メートル」法に瓦や米といふ漢字を持ち出して之を「メートル」「グラム」と讀ませようとしたのは親の心子知らずで、田中館博士も之には苦笑したに相違ない。

一體、瓦や米の字の何處をたゝいても「メートル」「グラム」といふ音が出て來る筈はない。況んや瓩と書いて「ミリグラム」と讀ませ、瓩といふ字をキログラムと讀ませるなどは實に無茶苦茶である。ハイカラなメートル法を主張してゐる人が他面、斯かる新熟字の漢字を製造して得々たりしは矛盾も甚しい。その當時吾々は之を攻撃したことがあつた。そこで度量衡關係の人々がまた評議して、上記の新漢字と原語の m. cm. gr. mgr. 等を並用しても宜しいといふ意見を發表した之を以て見ると、「メートル」法は如何に考へて見ても、シックリと日本語に副はない。尺、寸、分、貫、匁といふ簡潔な音に代へるものとしては面倒臭い程、採用せぬと拒否して居る。斯くて協調どころか國際的には益々複雜となるばかりだ。その二三の例を擧げて見よう。

同じくガローンといふても英國は四・五リートルに當り、米國のは三・七八リートルに當る。また英では今日、猶ほオンスを日常使用してゐる。

馬力といふのも獨（P.K）と、英（H.P）と少しの差異がある。ネヂは獨ではメートルで造り、英米ではインチで造る小さなネヂになると見分けがつかぬから獨逸製と英米製とを取り違へてネヂ込むとメチヤ〳〵になつて仕舞ふ。

ボーメBaumé比重計には米のPetroorial Baumé あり、また英の何々式ボーメと會社毎に違つた種類が澤山にある。これ等は總べて商略上から來てゐるので彼れ等のあいだに協調しようといふ考へは少しもない。

斯かる狀勢で、國際間では協調どころでなく、旅行にも貿易にも、昔のまゝの不便で萬國度量衡會議も、メートル主義も全然裏切られた形である。（未完）

記者附記。志賀博士は元京城帝國大學總長にして志賀菌の世界的發見者であります。

懸賞標語募集

▼趣旨　メートル法強制反對、尺貫法存續

▼賞金　▽壹等、參拾圓一人▽貳等、四等、壹圓圖書切符五十人△五等、本誌半ケ年分購讀券貳百人

▼締切　應募總數一萬通に達した時

▼審査　本聯盟理事十名以上合議

▼用紙　官製葉書に限る

▼同文　は先着を採り後便は失權

▼發表　『昭和の光』誌上

▼申込　本誌發行所編輯部宛

現に各國相違して協調なし

「メートル」法は國際的に萬國に採用せらるゝから總べての點に便益だといふのが度量衡改正の一理由であつた。然るに十四年後の今日、英米の二大國は自國のインチ、ヤード、ポンドを固守して居る米國は斷然「メートル」法などの外國制はくどい。これは「メートル」法論者の第一の失敗であつた。

癸酉極月廿日「メートル」法實施之延期

霞關生

岡上高築　岸和田
部長須　擁護尺貫法
景狀依舊青史傳

我がメートル法は國際規約と一致せず

海軍中將　淺野正恭

◆

現下に於ける我が國は學界、思想界、政界、實業界その他あらゆる方面にわたり、或ひは行き詰りとなり、或ひは雜然紛然その歸趨するところを知らずといふ有樣を呈してゐる。

彼の「メートル」法なるものも、一度それが問題となるや甲論乙駁、各々執つて下らず、これ亦た歸着するところを知らぬ狀態である。それが何れに決着しやうとも相互を滿足せしむる結果は望まれない有らゆる方面に行き詰りを生じ歸趨するところを知らぬやうになつたのはその本を忘れて末にのみ走る故だと私は信ずる。すべてに對する方策としては宜しく其の本然に復歸すべしといふ一語に盡きる。今これ等の一々につき詳論する限りでないから、茲では單に「メートル」法についてのみ述べやうと思ふ。

◆

『「メートル　法强制施行反對意見集』に『國際規約に一致せざる我が「メートル」法』なる私の一文が載せられてある。ところが『計量界』九月號に『「メートル」法は國際規約に一致す』として、私の文が抄錄され、それに一々說明が加へられてある。國際規約と一致するか否かといふ問題の如きは、私に取つては實は第一義的のものでないから、さう力說するにも當らぬが一旦、問題となつた以上、或る程度まで筋道を明かにして置かねばならぬ。さうでないと『計量界』の所說を一見したものは、成る程さうかと思はれるやも測られぬからである。それでは私としても甚だ相濟まぬことになる恐れがある。以下主として之に就いて述べる。

◆

重力の値は『計量界』に於ても『正式に認むる必要がある』と記して居る。是れは何人でも異存のないところである。そして『重力の値は至る處で異なるが故に、これを一定して置く必要がある』といふことも亦たその通りである。だから國際規約では g＝980.665 として、誤差のない絕對値を定めたのである。然るに我が國では田中館博士が計量した平均値が九八〇に近いから、計算上繁雜であるところの g＝980.665 を止めて、之を 980 としたのだといふ　それで國際規約に一致するといふのはチト辻褄が合はな過ぎはせぬか。980 と決めたのは我が國の便宜によることであつて、この便宜のためには、國際規約と一致はせなくともよいといふのであるのか。各國でもそれ〴〵便宜の爲めに異なつた値を使用するとしたならば、國際條約などといふものは、有つても無くてもよいものとならう。g は既に到るところで異なるから、之を一定しようとするのが國際條約である。決して便宜のためといふのではないことを知らねばならぬ。

◆

我が國では g＝980 として定めた。然るに農商務省告示第百六十號で、壓力の標準値を定むるには g＝980.665 を使用して居る。是れは前にも既に指摘した通りである。まさか壓力を計算する時のみ計算の煩が無いといふのではあるまい。

g の値は此くの如く我が國では二つの値を採用して居る。それは前の一定するといふことに矛盾するのである。が『計量界』では、此の點に關する說明を缺いて居る。卽ち默殺して其の矛盾を解消せんとするものとしか思はれない。苟くも國民に臨まんとするものゝ態度として、甚だしく公明を缺くものといはねばならぬ

◆

是れは壓力に關する事柄ではないが、例へば茲に次なる式によつて、其の數値を算出するの要ある場合がありとせよ。然る時、この二つの値ある g を何れにすべきかといふことが、必ず問題となるに相違ない。t＝30℃として、g＝980 としたものと、g＝980.665 としたものとは、各四四一〇「メートル」、四四一二、九九二五「メートル」となり、約三「メートル」の差を生ずることゝなる。此の差は抹殺し得べくもないから、どう取扱へばよいのか。それで國內的には前者、國際的には後者といふやうな複雜なことをせねばならぬといふのであるならば、折かく國際「メートル」制を採用した効が多少なりとも減殺されることにならねば止むまい。

——以下次號——

社告

——運動の具體化に就て——

祖國のため尺貫法存續運動に御參加御盡瘁あらんことを望みます。その內容としては本誌の多數有代頒布、購讀者の募集、尺貫法に關する研究會、講演會、演說會等の開催、本聯盟支部の開設、獨立したる團體の結成、各種既存團體の活動等、一々枚擧に遑なきも、夫れ等の具體的方法は御照會次第、委細回答いたします。その國家的御盡力に對しては本部としても充分なる連絡を保ち且つ感謝、表彰の意を表したき方針であります。

尺貫法存續聯盟.

閲覧室

岩崎灌園先生之像
（藤浪剛一氏藏）